



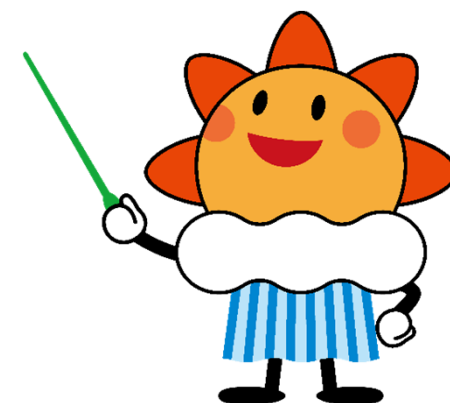
向こう3か月と冬の 天候の見通し

3か月予報（10～12月）
寒候期予報（冬：12～2月）



ぼるけん

福岡管区気象台 気象防災部予報課
（令和8年9月18日14時発表）



はれるん

10～12月・冬の予報のポイントと留意点

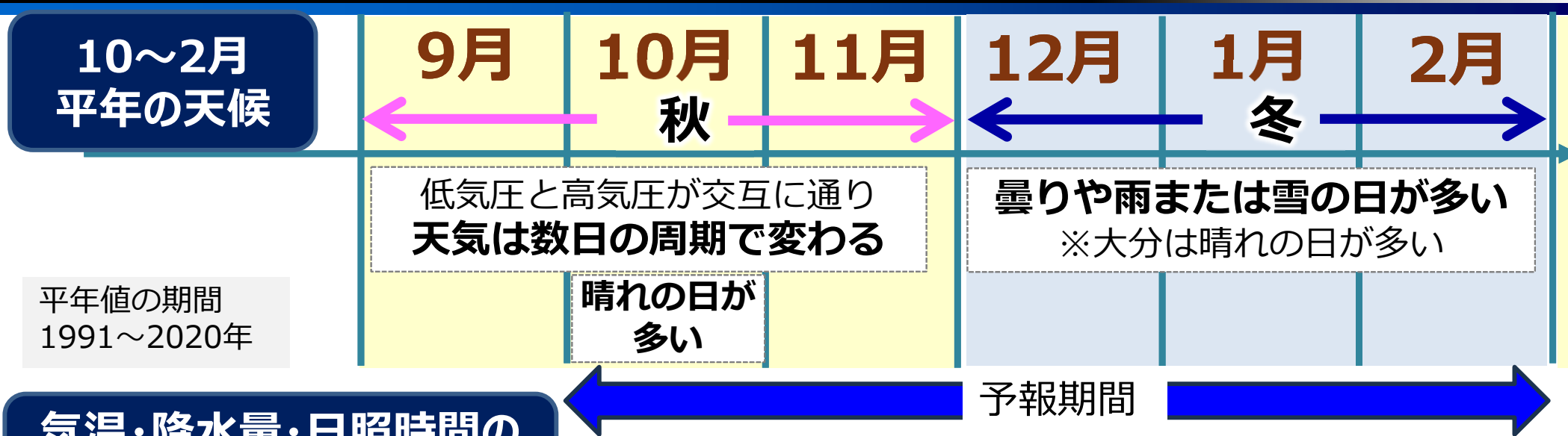
予報のポイント

- 向こう3か月の気温は、暖かい空気に覆われやすく、後半は寒気の影響が小さいため、**高い**。
- 向こう3か月の降水量は、11月以降低気圧の影響を受けやすいため、**平年並か多い**。ただし、10月は高気圧に覆われやすいため、降水量は**平年並か少ない**。
- 冬の気温は、季節風が弱く、寒気の影響が小さいため、**高い**。
- 冬の降水量は、低気圧の影響を受けやすいため、**多い**。

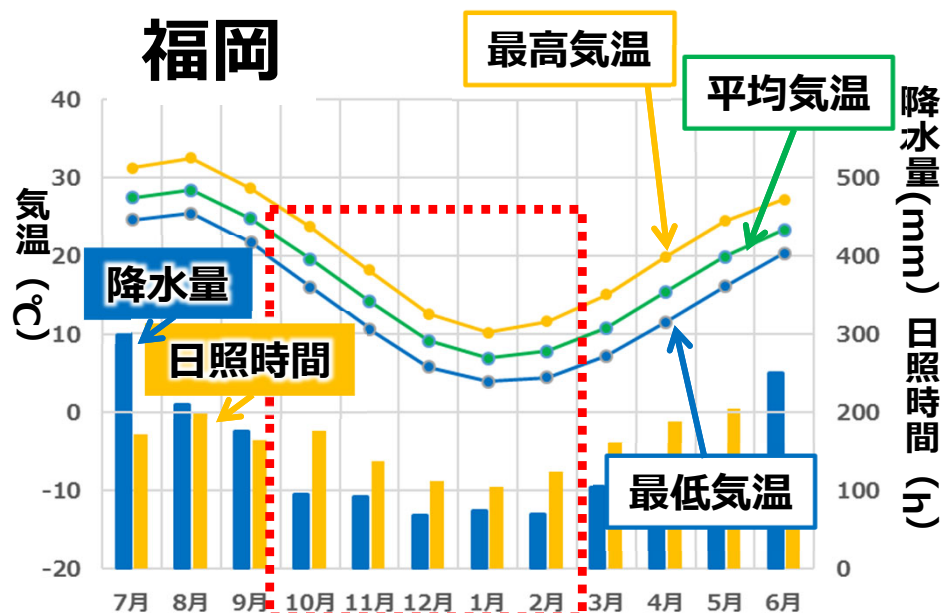
留意点

- 九州北部地方は、7月7日頃の梅雨明け以降、降水量が少ない状態が続いています。**向こう1か月の降水量は少ない見込み**です。11月以降の降水量は多い予報ですが、平年でも雨の少ない時期になります。このため、**少雨の状態を解消するほどのまとまった雨が降る可能性は小さい**でしょう。**水の管理に注意**してください。
- 秋は台風や秋雨の時期。近年は大雨の発生頻度が増加しています。また、冬は一時的に**強い寒気**が入る可能性があります。最新の気象情報により一層の留意をお願いします。

秋～冬の九州北部地方の平年の天候経過



気温・降水量・日照時間の月別の平年値



秋～冬の平年の天候のポイント

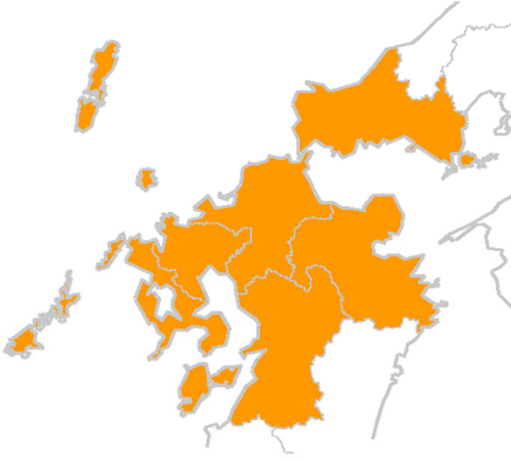
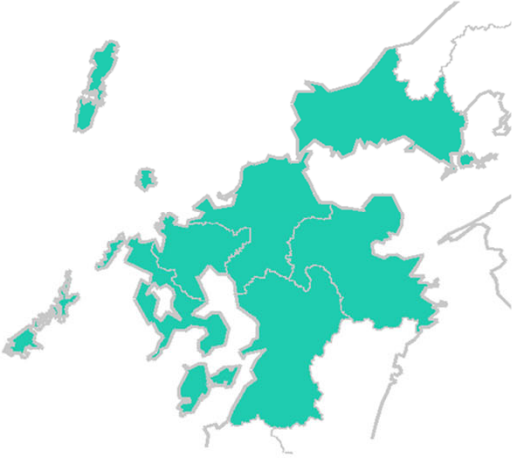
- 10～11月は周期変化の天候
- 冬は冬型の気圧配置となり、**曇りや雨または雪の日が多い**が、**降水量は少ない**。
- 1月（1月下旬～2月上旬）は最も気温が**低い**時期にあたる

九州北部地方の天候の特徴

https://www.data.jma.go.jp/cpd/j_climate/kyuhoku/main.html

天候の見通し（10～12月）

向こう3か月（10～12月）の平均気温・降水量

九州北部地方 (山口県を含む)	 平均気温（3か月） 10～12月	 降水量（3か月） 10～12月
	低 10 並 40 高 50 高い 見込み	少 20 並 40 多 40 平年並 か 多い 見込み
 数値は予想される 出現確率です	 高い確率 70%以上 60% 50% 40% (20:40:40) 40% (30:30:40) 平年並 - 平年並 低い確率 40% (40:30:30) 40% (40:40:20) 50% 60% 70%以上	 多い確率 70%以上 60% 50% 40% (20:40:40) 40% (30:30:40) 平年並 - 平年並 少ない確率 40% (40:30:30) 40% (40:40:20) 50% 60% 70%以上

天候の見通し（月別）

	10 月	11 月	12 月	気温
天候	天気は数日の周期で変わりますが、高気圧に覆われやすいため、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。	天気は数日の周期で変わりますが、低気圧の影響を受けやすいため、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。	低気圧の影響を受けやすいため、平年に比べ曇りや雨または雪の日が多いでしょう。	
気温	低 20 並 30 高 50 高い 見込み	低 20 並 30 高 50 高い 見込み	低 20 並 30 高 50 高い 見込み	高い確率 70%以上 60% 50% 40% (20:40:40) 40% (30:30:40) 平年並 平年並 低い確率 40% (40:30:30) 40% (40:40:20) 50% 60% 70%以上
降水量	少 40 並 40 多 20 平年並 か 少ない 見込み	少 20 並 40 多 40 平年並 か 多い 見込み	少 20 並 30 多 50 多い 見込み	多い確率 70%以上 60% 50% 40% (20:40:40) 40% (30:30:40) 平年並 平年並 少ない確率 40% (40:30:30) 40% (40:40:20) 50% 60% 70%以上

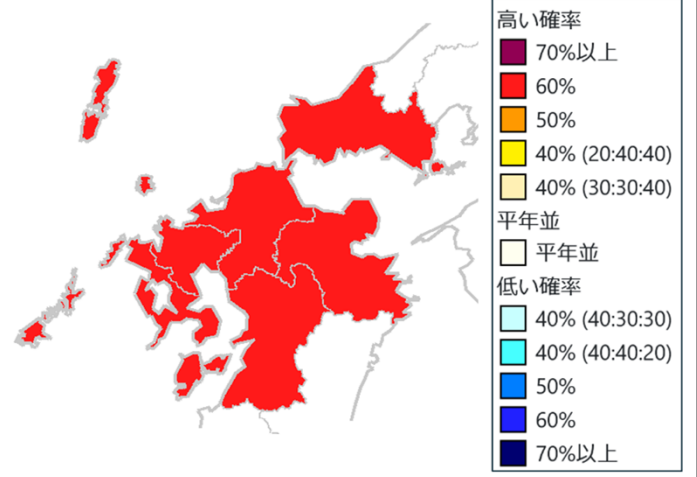
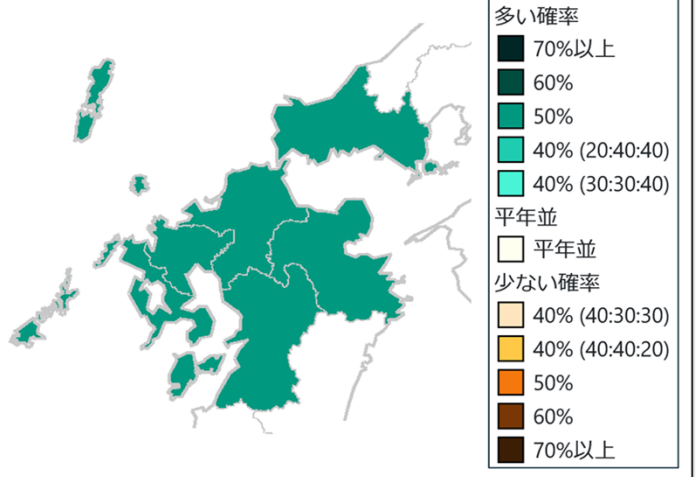
10月の降水量を少雨側へ変更：高気圧に覆われやすい予想となったため

天候の見通し（冬：2026年12月～2027年2月）

予想される冬（12～2月）の天候

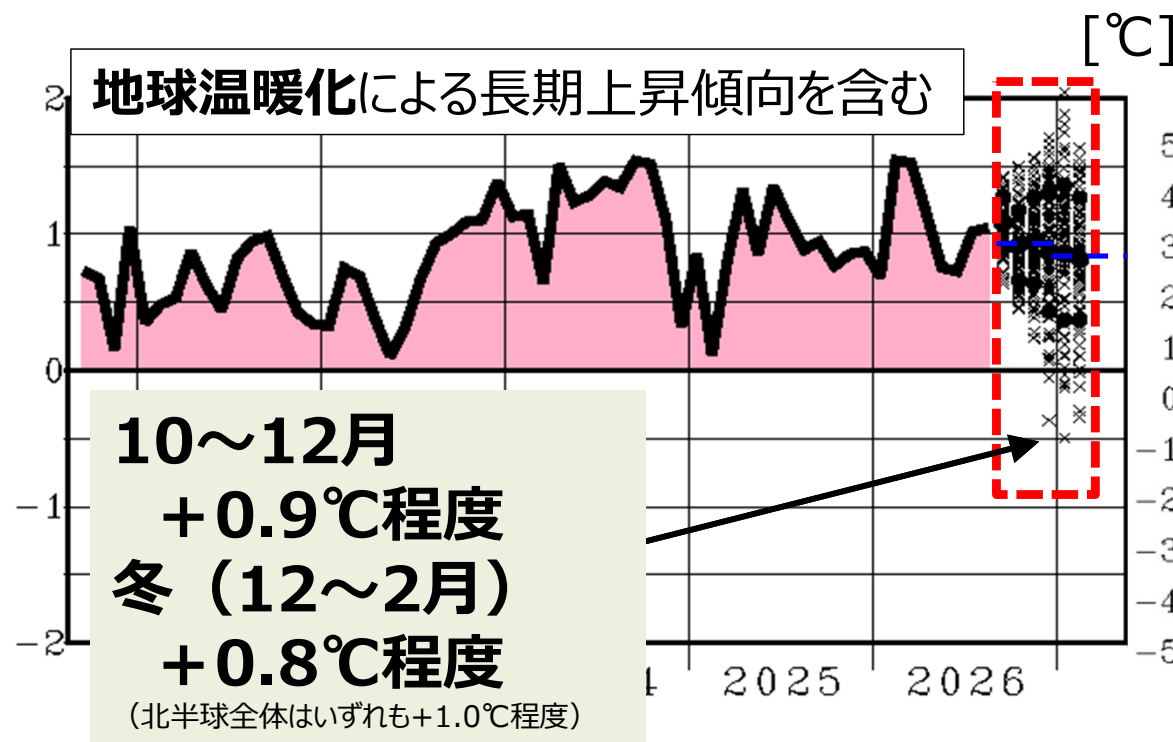
平年に比べ、曇りや雨または雪の日が多いでしょう。

冬（12～2月）の平均気温・降水量

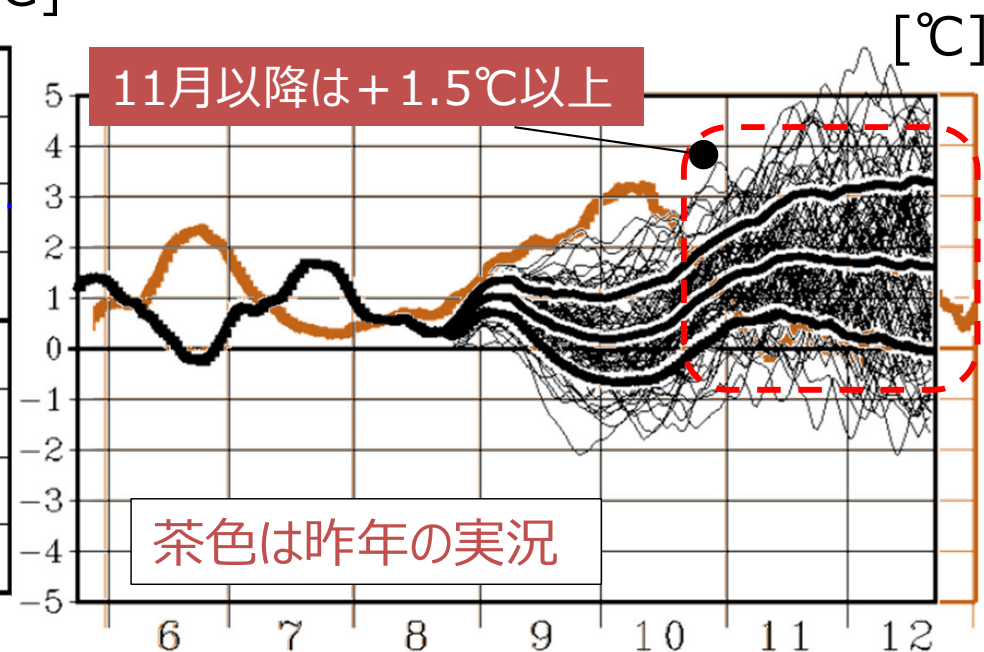
九州北部地方 (山口県を含む)	 平均気温（3か月） 12～2月	 降水量（3か月） 12～2月
	低 10 並 30 高 60 高い 見込み	少 20 並 30 多 50 多い 見込み
 数値は予想される 出現確率です	 高い確率 70%以上 60% 50% 40% (20:40:40) 40% (30:30:40) 平年並 低い確率 40% (40:30:30) 40% (40:40:20) 50% 60% 70%以上	 多い確率 70%以上 60% 50% 40% (20:40:40) 40% (30:30:40) 平年並 少ない確率 40% (40:30:30) 40% (40:40:20) 50% 60% 70%以上

大気の温度の予測

北半球中緯度の大気の温度は**高い**状態が続く。



北半球中緯度の大気の温度の解析値と予測
対流圏(高さ約1500~10000m) 気温平年差



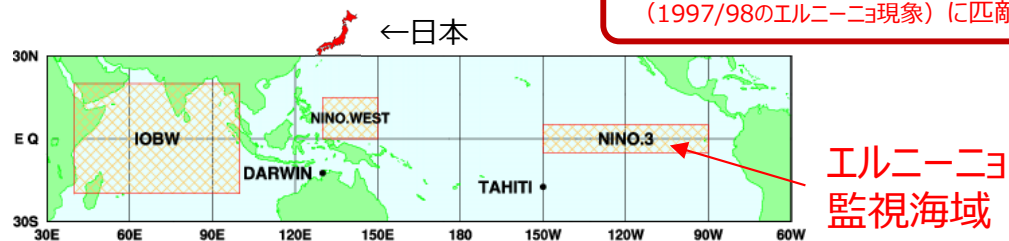
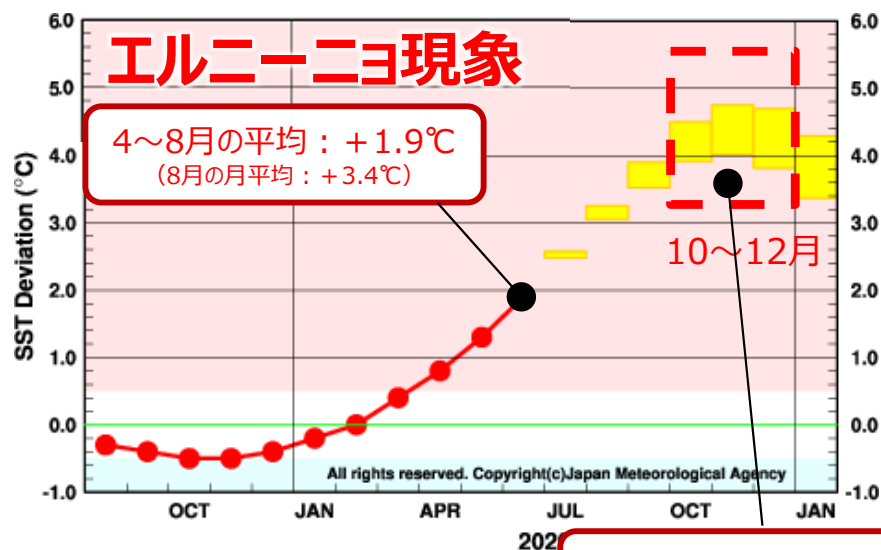
西日本の上空約1500m付近の気温平年差
(向こう3か月の予測)

熱帯域の海面水温の予測

エルニーニョ監視速報 No.408

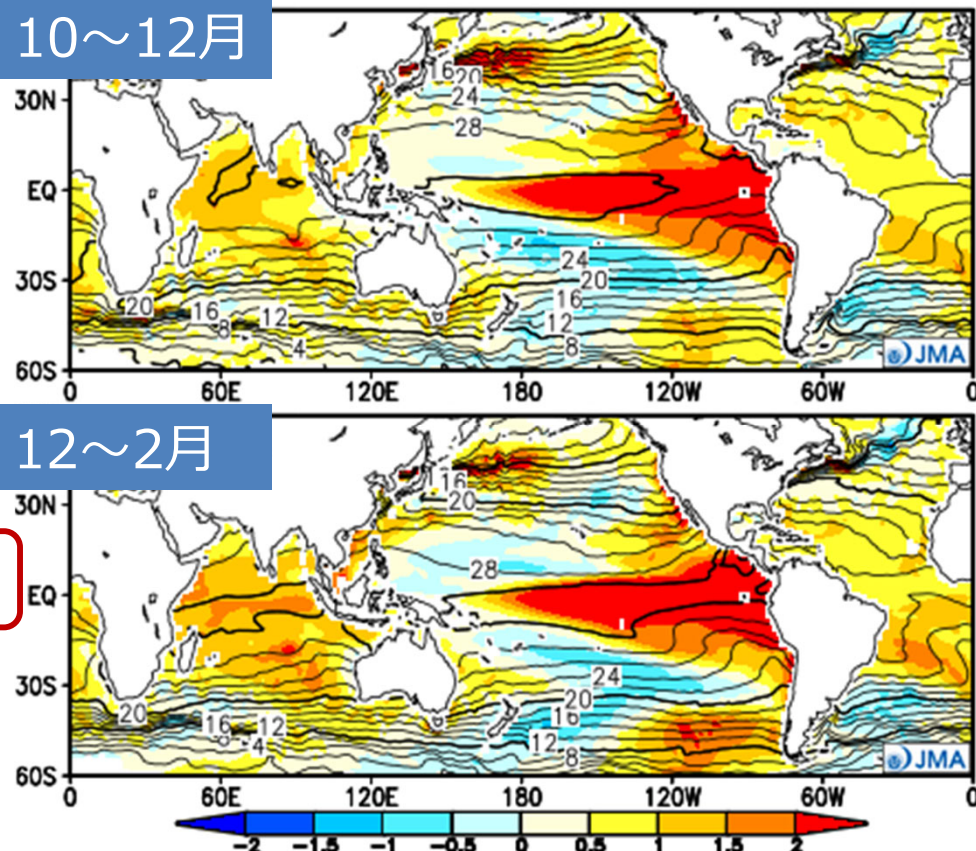
2026年春から**エルニーニョ現象**が続いているとみられる。
今後、冬にかけて**エルニーニョ現象**が続く見込み（100%）。

エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値の差



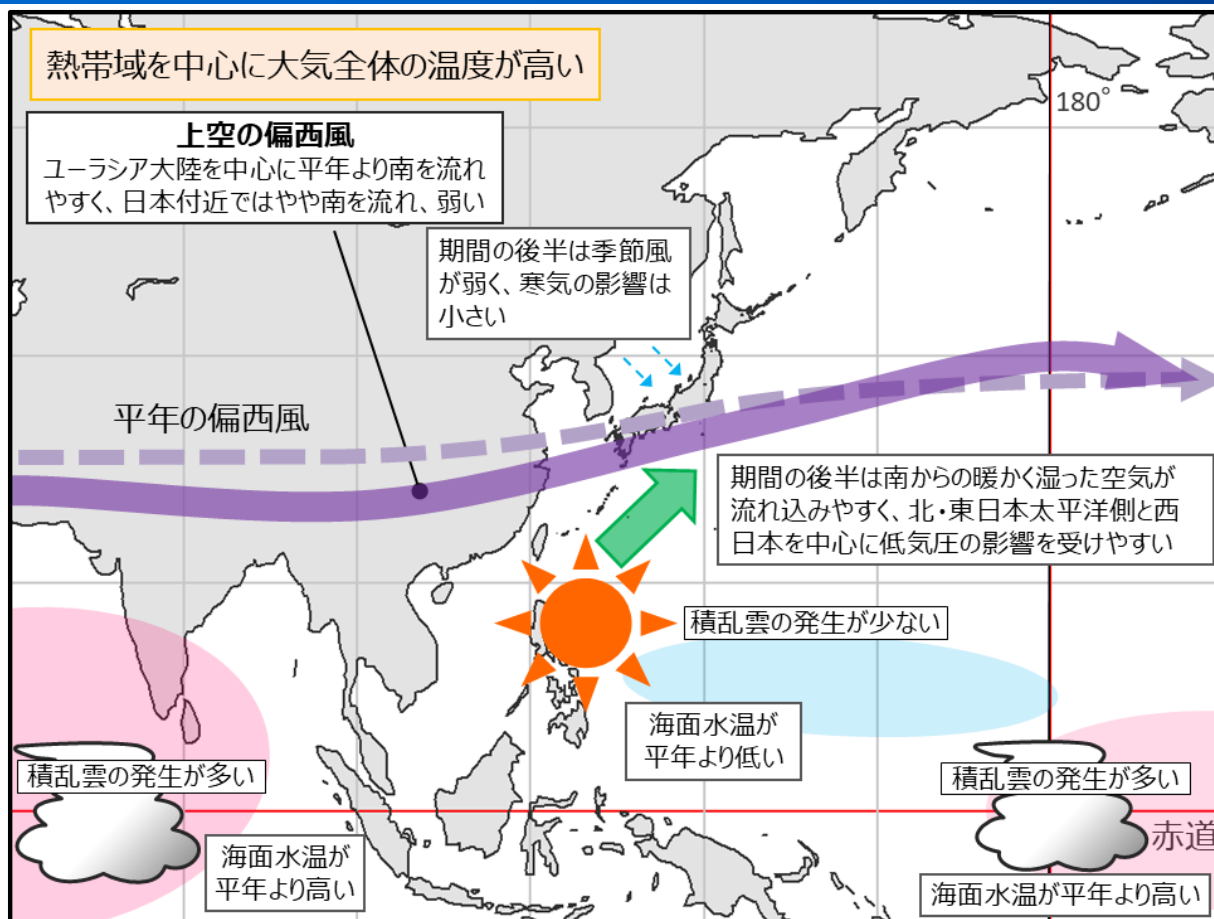
エルニーニョ監視速報 URL：
https://www.data.jma.go.jp/cpd/elnino/kanshi_joho/kanshi_joho1.html

海面水温の予測図



海面水温が高い海域が、太平洋赤道域中・東部
⇒今後冬にかけてもエルニーニョ現象が続く

予想される海洋と大気の特徴（10～12月）



【熱帯域の海面水温、対流活動、上空の偏西風】

- **エルニーニョ現象**が冬にかけて続く見込みで、海面水温は太平洋赤道域の東部～中部とインド洋西部で高く、積乱雲の発生はこれらの海域で多い。一方、フィリピン付近では積乱雲の発生が少ない。
- この対流活動の偏りから、上空の偏西風はユーラシア大陸を中心に平年より南を流れやすく、日本付近ではやや南を流れ、弱い。

気温のポイント

3か月平均で、**高い**
(要因)

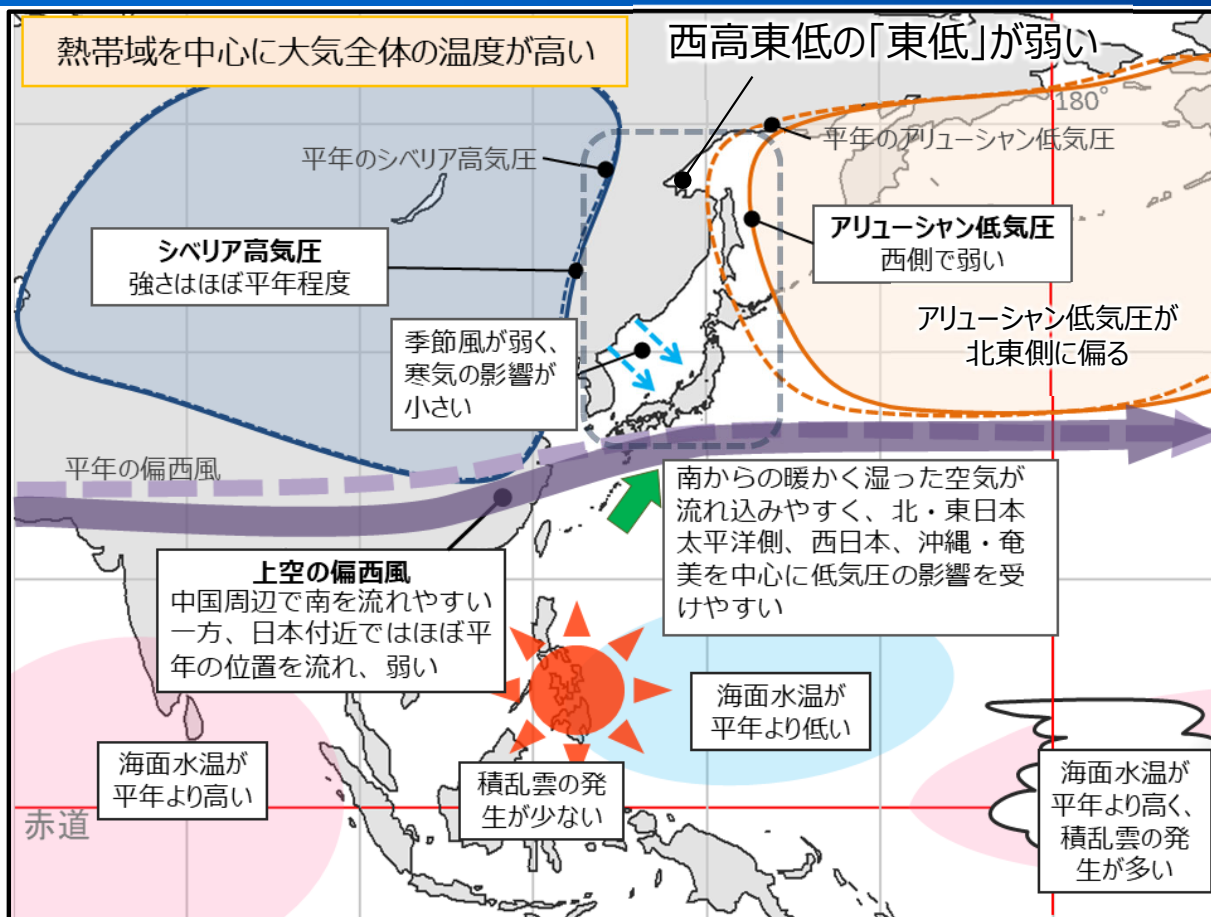
- ① 期間を通して**暖かい空気**に覆われやすい。
- ② 期間の後半は、**季節風が弱く寒気の影響が小さい**（エルニーニョ現象の特徴）

降水量のポイント

平年並か多い（後半ほど**多雨**）
(要因)

- ① **10月**は高気圧に覆われやすいため**少雨**
- ② 期間の後半は、**季節風が弱く、南からの暖かく湿った空気が流れ込みやすい**。低気圧の影響を受けやすいため、**多雨**（エルニーニョ現象の特徴）

予想される海洋と大気の特徴（冬）



【熱帯域の海面水温、対流活動、上空の偏西風】

- **エルニーニョ現象**の影響で、海面水温は太平洋赤道域の東部～中部で高く、積乱雲の発生はこれらの海域で多い。一方、フィリピン付近では積乱雲の発生が少ない。
- この対流活動の偏りから、上空の偏西風は中国周辺で南を流れやすい一方、日本付近ではほぼ平年の位置を流れ、弱い。

気温のポイント

寒気の影響が小さいため、**高い**。
(要因)

- ① 大陸のシベリア高気圧の強さは、ほぼ平年程度で、**アリューシャン低気圧**は平年よりも北東側に偏り、西側で弱いいため、日本付近では西高東低の気圧配置は長続きしない。このため、季節風が弱く、寒気の影響は小さい。
- ② 地球温暖化やエルニーニョ現象の影響で、大気全体の温度が高い

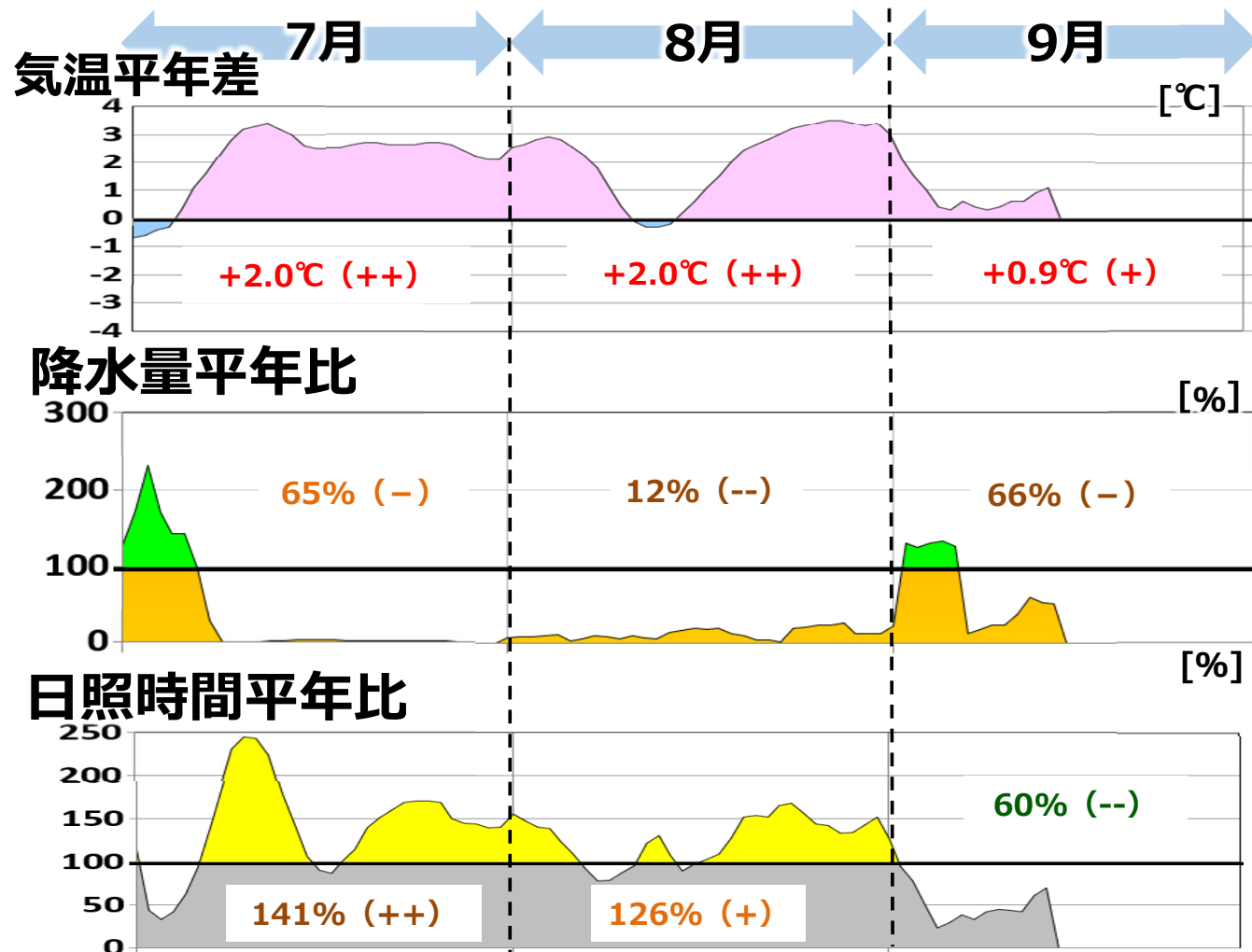
ただし、一時的な寒気の強まりによる気温低下・降雪には要注意

降水量のポイント

低気圧の影響を受けやすいため、**多雨**
(要因)

- ① 季節風が弱く、寒気の影響が小さい
- ② **南からの暖かく湿った空気が流れ込みやすい。**

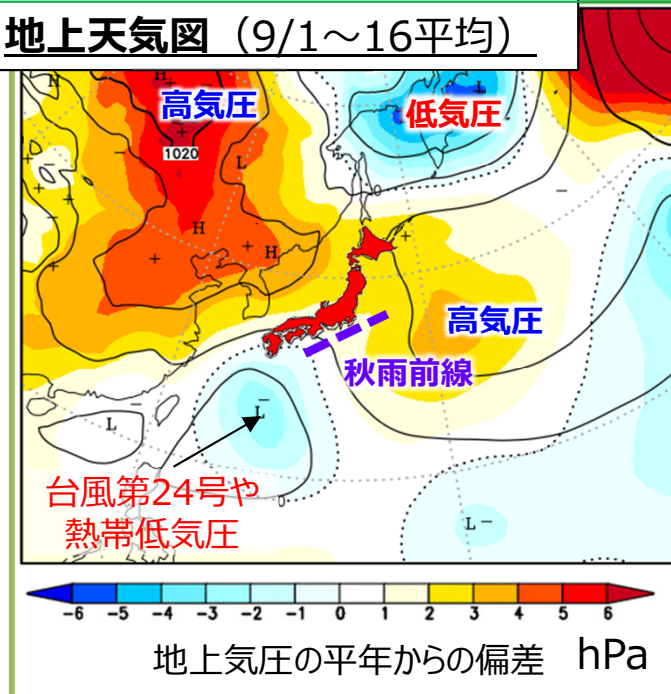
九州北部地方の天候経過（7～9月）



【9月（16日まで）の天候】

期間のはじめを中心に暖かい空気が流れ込みやすかったため、気温は平年より高くなりました。
本州南岸付近に停滞した前線に向かって湿った空気が流れ込んだため、曇りや雨の日が多く、日照時間はかなり少なくなりました。降水量は熊本県や大分県で平年を上回った所がありますが、その他は湿った空気の影響を受けにくかったため、平年を下回りました。

地上天気図（9/1～16平均）



数値は月平年差（比）・階級区分値

9月の値は16日までの暫定値

グラフは5日移動平均値でプロット

階級区分値

- (++) : かなり高い/かなり多い
- (+) : 高い/多い
- (0) : 平年並
- (-) : 低い/少ない
- (--) : かなり低い/かなり少ない

10～12月・冬の予報のポイントと留意点のまとめ

予報のポイント

- 向こう3か月の気温は、暖かい空気に覆われやすく、後半は寒気の影響が小さいため、**高い**。
- 向こう3か月の降水量は、**11月以降低気圧の影響を受けやすい**ため、**平年並か多い**。ただし、**10月**は**高気圧に覆われやすい**ため、降水量は**平年並か少ない**。
- 冬の気温は、**季節風が弱く、寒気の影響が小さい**ため、**高い**。
- 冬の降水量は、**低気圧の影響を受けやすい**ため、**多い**。

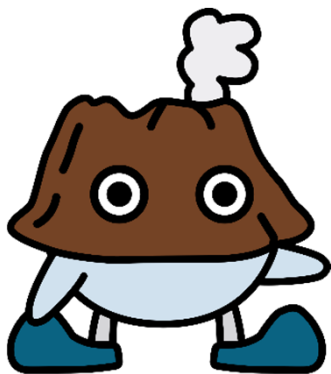
留意点

- 九州北部地方は、7月7日頃の梅雨明け以降、降水量が少ない状態が続いています。**向こう1か月の降水量は少ない見込み**です。11月以降の降水量は多い予報ですが、平年でも雨の少ない時期になります。このため、**少雨の状態を解消するほどのまとまった雨が降る可能性は小さい**でしょう。**水の管理に注意**してください。
- 秋は台風や秋雨の時期。近年は大雨の発生頻度が増加しています。また、冬は**一時的に強い寒気**が入る可能性があります。最新の気象情報により一層の留意をお願いします。

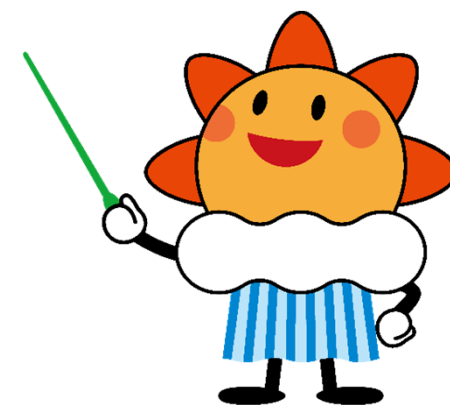
次回の3か月予報の発表日時 **10月20日（火）14時**



参考資料

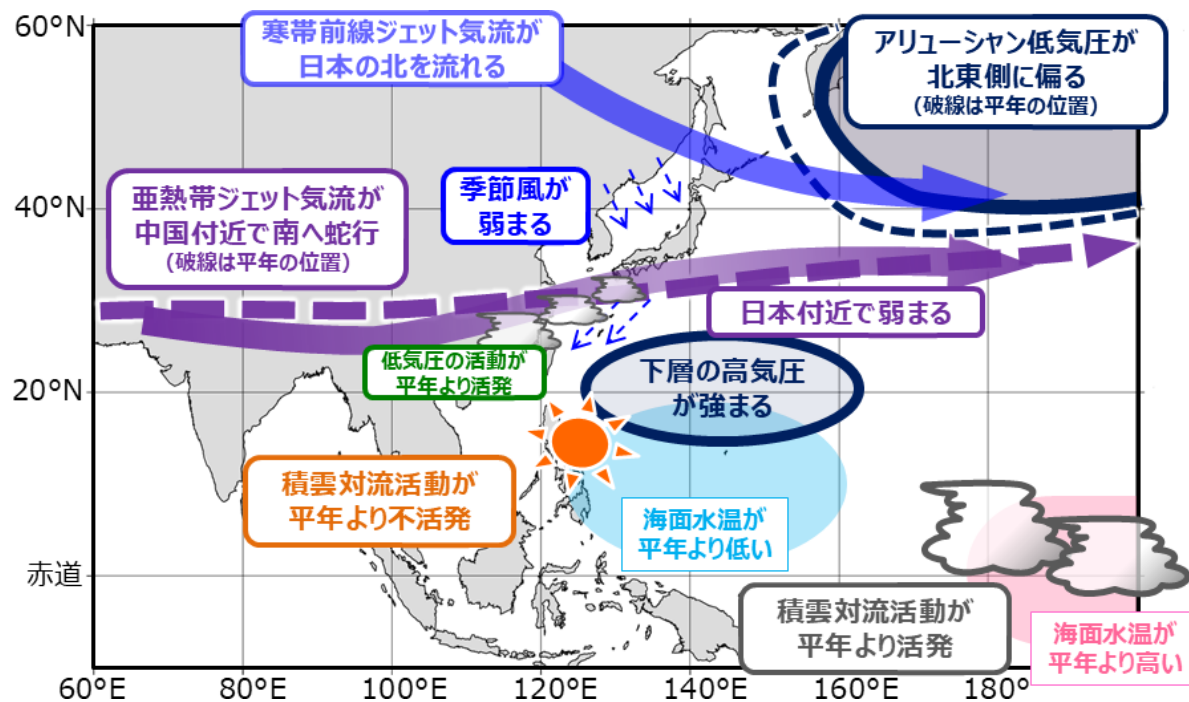


ぼるけん



はれるん

エルニーニョ現象時の冬の海洋と大気の特徴



- ・平均気温：西日本で平年並か高い。
- ・降水量：東日本太平洋側、沖縄・奄美が多い。
- ・日照時間：西日本太平洋側で少ない。
東日本太平洋側で平年並か少ない。

太平洋熱帯域の海面水温

西部：低い 中・東部：高い

太平洋赤道域の対流活動

中・東部：活発

フィリピン周辺：不活発

赤道域対流活動の東西の偏りにより

- ✓ 上空の偏西風は中国周辺で南へ、日本周辺で弱まる
- ✓ アリューシャン低気圧は北東側に偏る
(= 西高東低の気圧配置が続かない)
- ✓ フィリピン周辺では、下層の高気圧が強まる

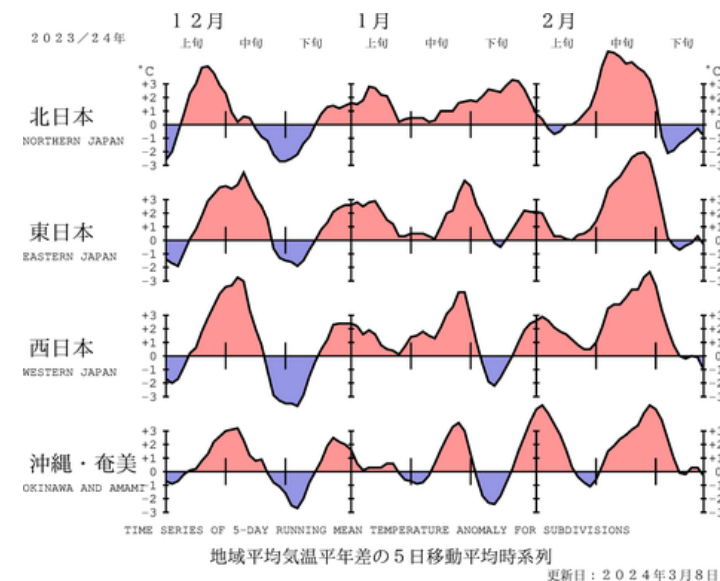
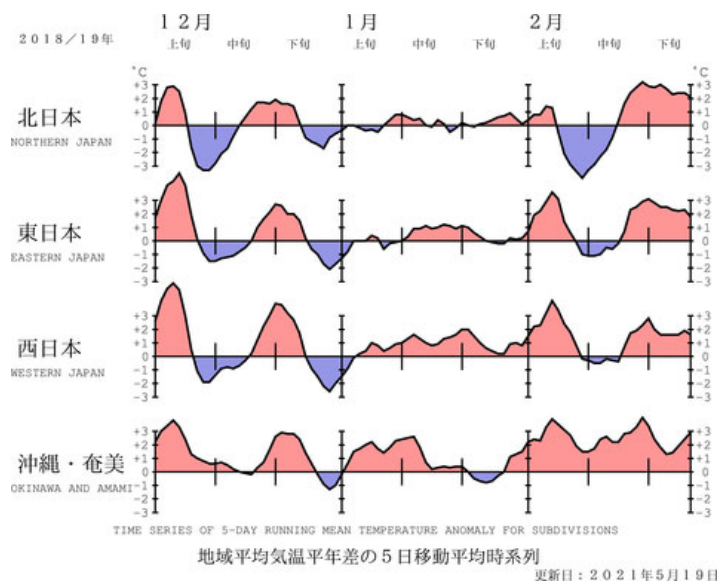
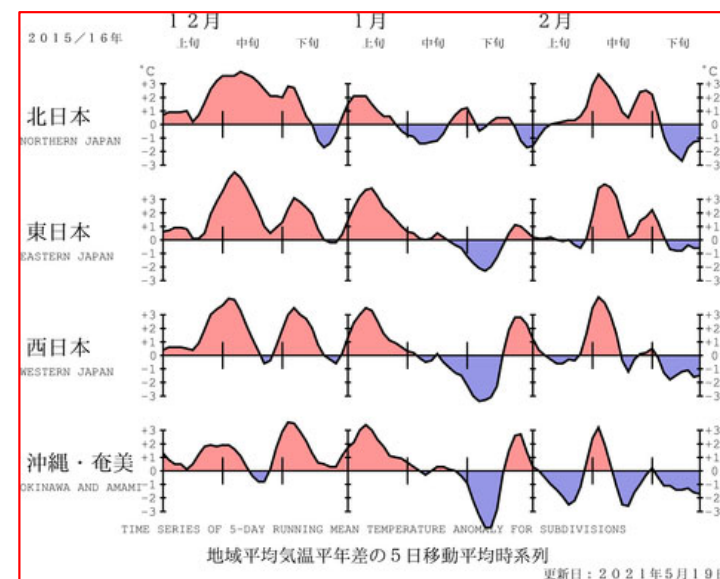
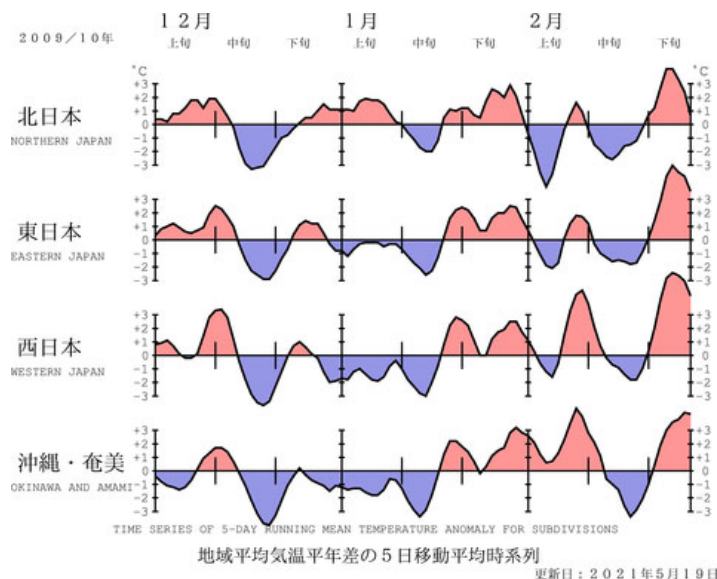
- ✓ 日本付近の季節風は弱まる
- ✓ 沖縄・奄美～本州周辺では低気圧の影響を受けやすい

気象庁HP「エルニーニョ／ラニーニャ現象が日本の天候に影響を及ぼすメカニズム」より

<https://www.data.jma.go.jp/cpd/data/elnino/learning/faq/whatiselnino3.html>

エルニーニョ現象時の冬の気温経過（直近4例）

平均すれば暖冬となった例が多い。
一時的な寒気の強まりにより気温の変動が大きい年が多い。



□は、エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差が+3.0℃を超えた事例

ダムの貯水率時系列（筑後川水系）

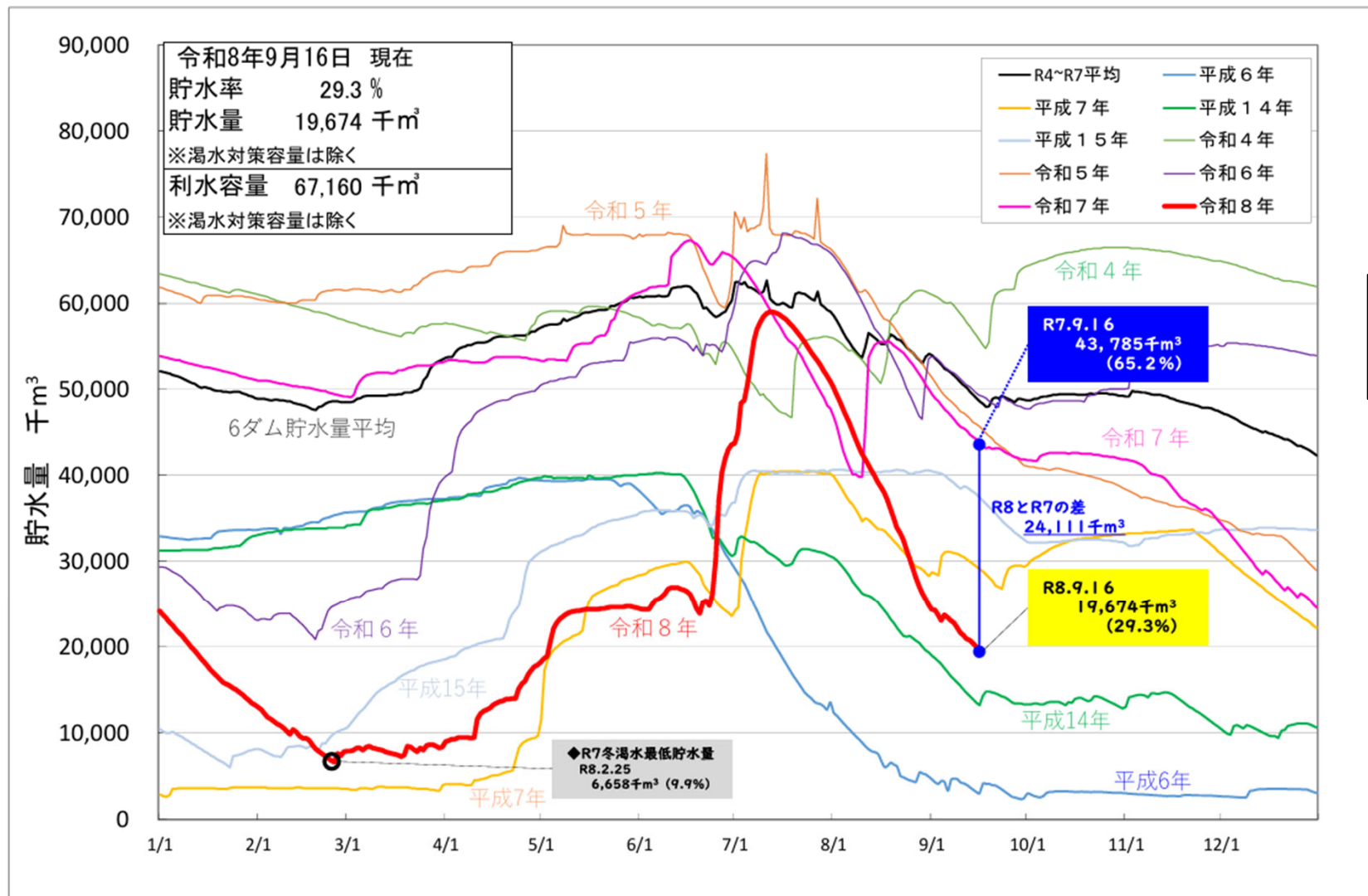
6ダム（江川・寺内・小石原川・大堰・合所・大山）貯水量経年変化図

R8.9.16時点

9/17開催

令和8年度 第6
回筑後川水系渇水
調整連絡会

資料1より抜粋



9/18 0時時点
貯水率

6施設の統合運用にて
都市用水向けに補給

28.6%

九州地方整備局
渇水情報

<https://www.qsr.mlit.go.jp/n-kawa/kasensaigai/kassui-r8.html>

※ 6ダム貯水量平均（R4～R7）は、小石原川ダム完成後の4カ年平均

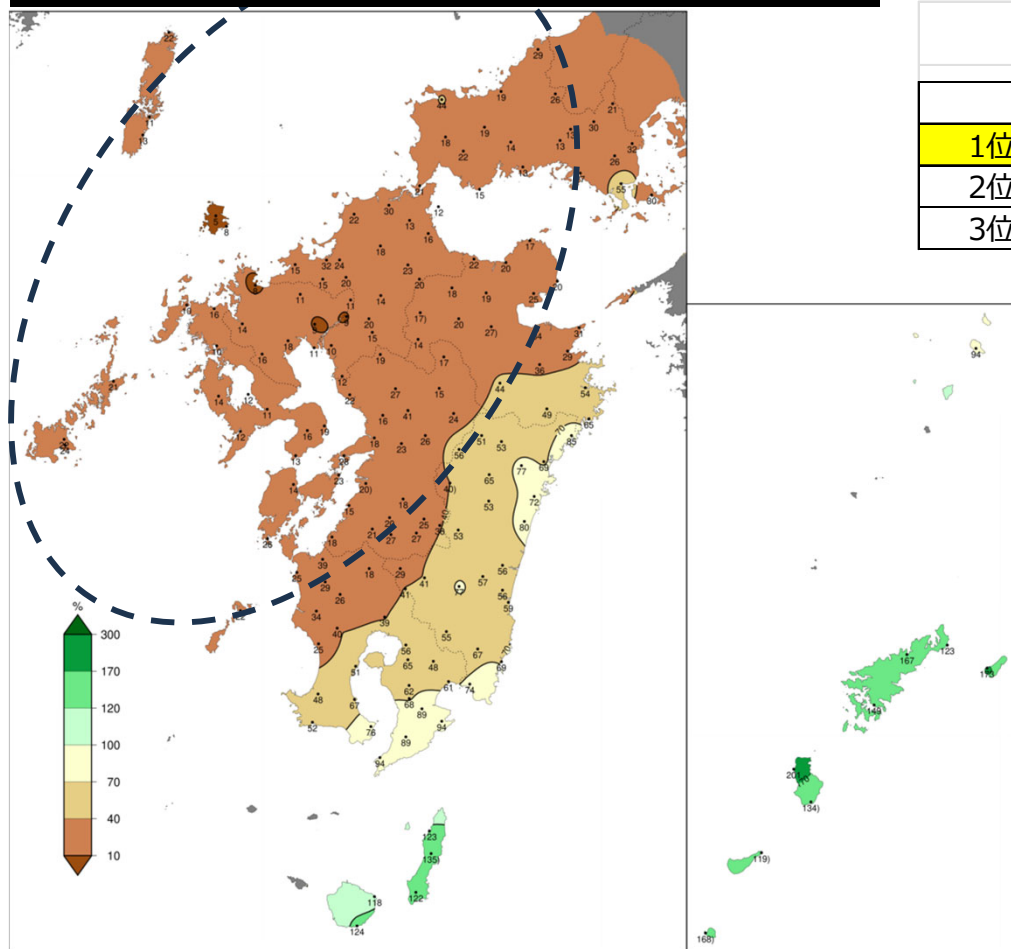
※ 平成6年～7年、平成14年～15は、江川・寺内・大堰・合所の合計貯水量

—4—

梅雨明け以降の少雨

- 梅雨明け以降、日降水量1ミリ未満の継続日数が複数地点で観測開始以降最長を記録（福岡、飯塚、長崎、佐世保）。福岡では1904年の36日を超える50日（7月7日～8月25日）。

7月7日～9月16日 降水量平年比



九州山地の西で降水量が少ない地点が広がる

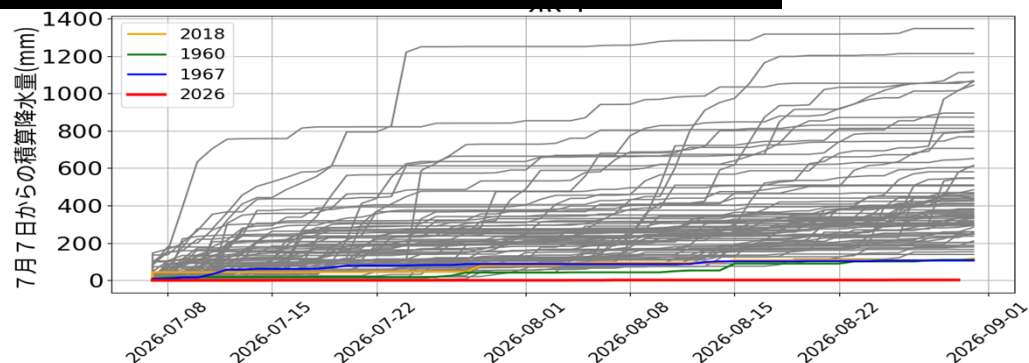
福岡の日降水量1ミリ未満の継続日数多い方からのランキング

			地点名	福岡		統計開始	1890
	継続日数	開始年	開始月	開始日	終了年	終了月	終了日
1位	50	2026	7	7	2026	8	25
2位	36	1904	8	1	1904	9	5
3位	34	1984	10	4	1984	11	6

2026年7月7日～8月31日降水量少ない方から

県名	地点	降水量 (mm)
大分県	杵築	1.0
大分県	武蔵	1.0
山口県	宇部	2.5
大分県	豊後高田	2.5
熊本県	熊本	2.5

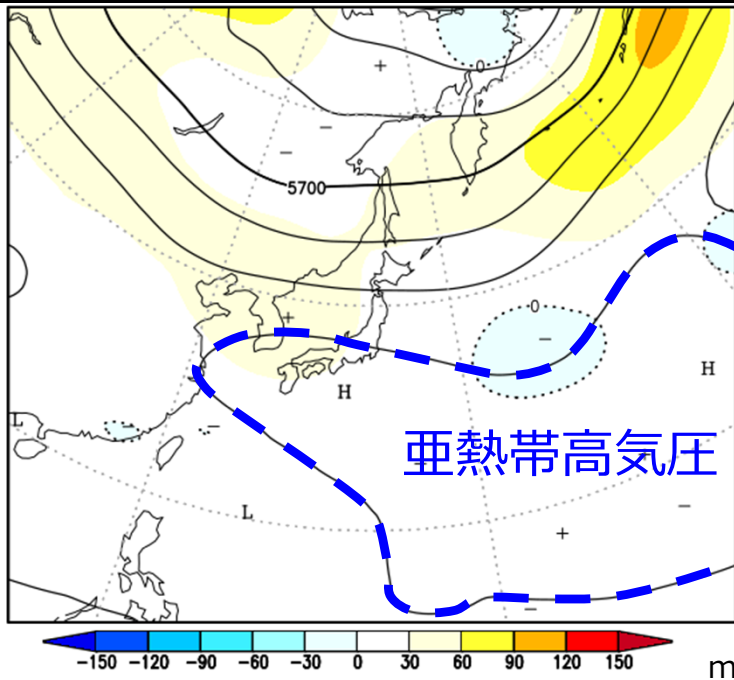
2026年7月7日～8月31日降水量積算（熊本）



梅雨明け以降の少雨の要因

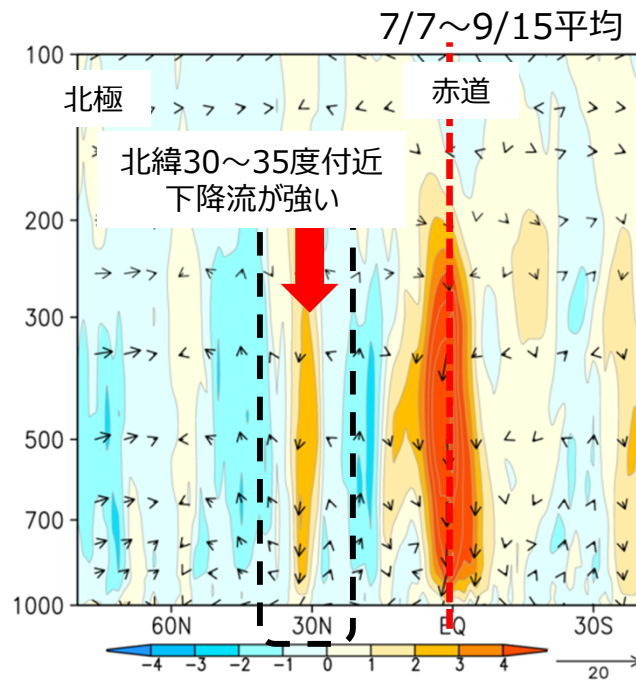
- 西日本付近は、背の高い高気圧（亜熱帯高気圧）に覆われやすい状態が続いている（左図）。
- 西日本付近は、平年に比べて下降流が強く、対流が立ちにくく、低気圧の影響を受けにくい（図・中）。
- 台風が沖縄・奄美付近を西進することが多く、東よりの山越えの乾いた風の影響を受けた（右図）。
- 9月に入り、日本付近に前線が停滞したが、九州の東に位置することが多く、雲は広がるものの、まとまった雨とはならなかった。

500hPa（上空5800m付近）
天気図（7/7～9/15）

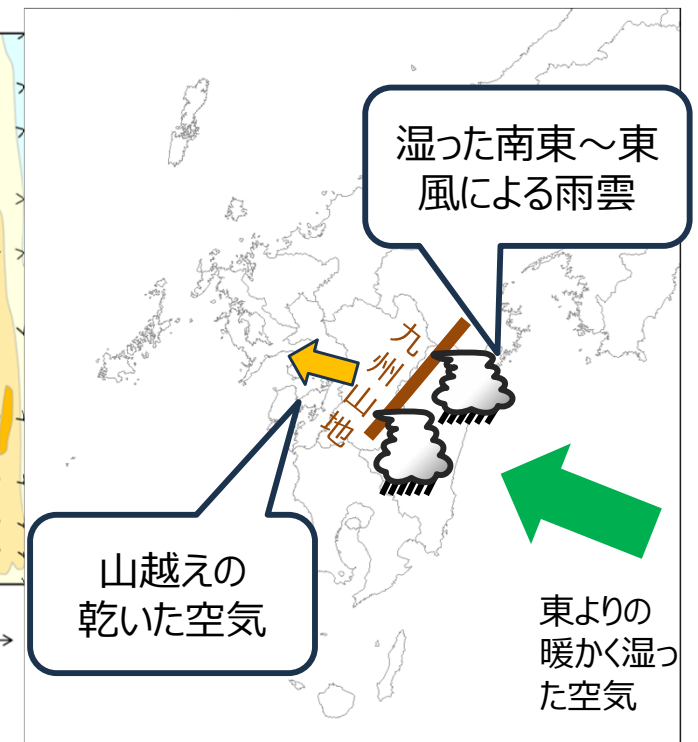


---線は、亜熱帯高気圧の張り出しに
対応する5880m高度線

東経120～135度付近の
鉛直流平年偏差



山越えの風の影響の
模式図



最近の10～12月の天候

過去10年間の九州北部地方の地域平均の 平均気温（平年差℃）と階級

年	10～12月	10月	11月	12月
2025	1.5	2.9	0.5	1.2
2024	1.4	2.6	1.8	-0.2
2023	0.4	-0.2	0.5	0.8
2022	0.2	-0.1	2.0	-1.4
2021	0.2	1.1	-0.4	0.0
2020	0.0	-0.3	0.9	-0.9
2019	1.0	1.2	0.5	1.3
2018	0.1	-0.8	0.0	1.0
2017	-0.7	0.4	-0.8	-1.8
2016	1.2	2.0	0.3	1.4

かなり高い

高い

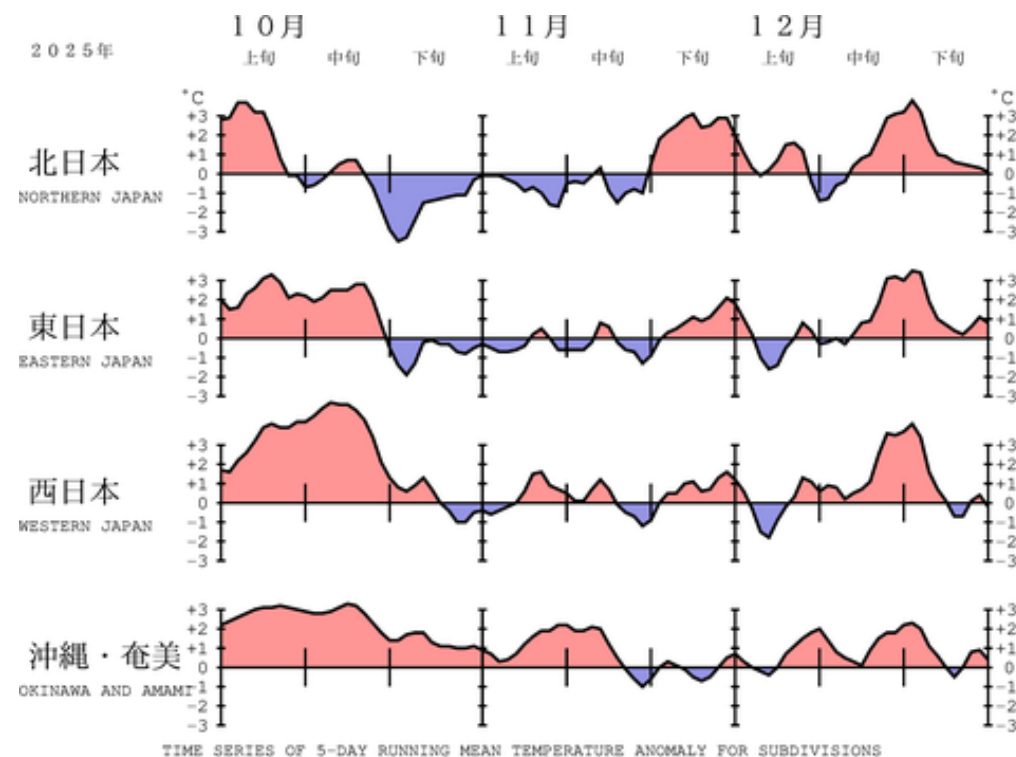
平年並

低い

かなり低い

年の色は、**赤**：秋にエルニーニョ現象が発生している
青：秋にラニーニャ現象が発生している

2025年 地域平均気温平年差



地域平均気温平年差の5日移動平均時系列

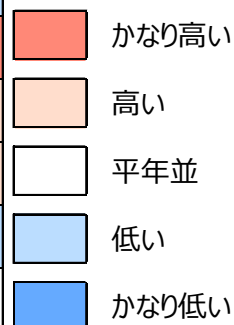
更新日：2026年1月10日

- ・最近10年の10～12月の平均気温は、全国的に平年並か高い年が多い。
- ・昨年（2025年）の10～12月は、暖かい空気に覆われやすかったほか、12月に冬型の気圧配置が長続きしなかったため、全国的に高温。12月は西日本太平洋側では高気圧に覆われやすく、かなりの多照。

最近の冬の天候

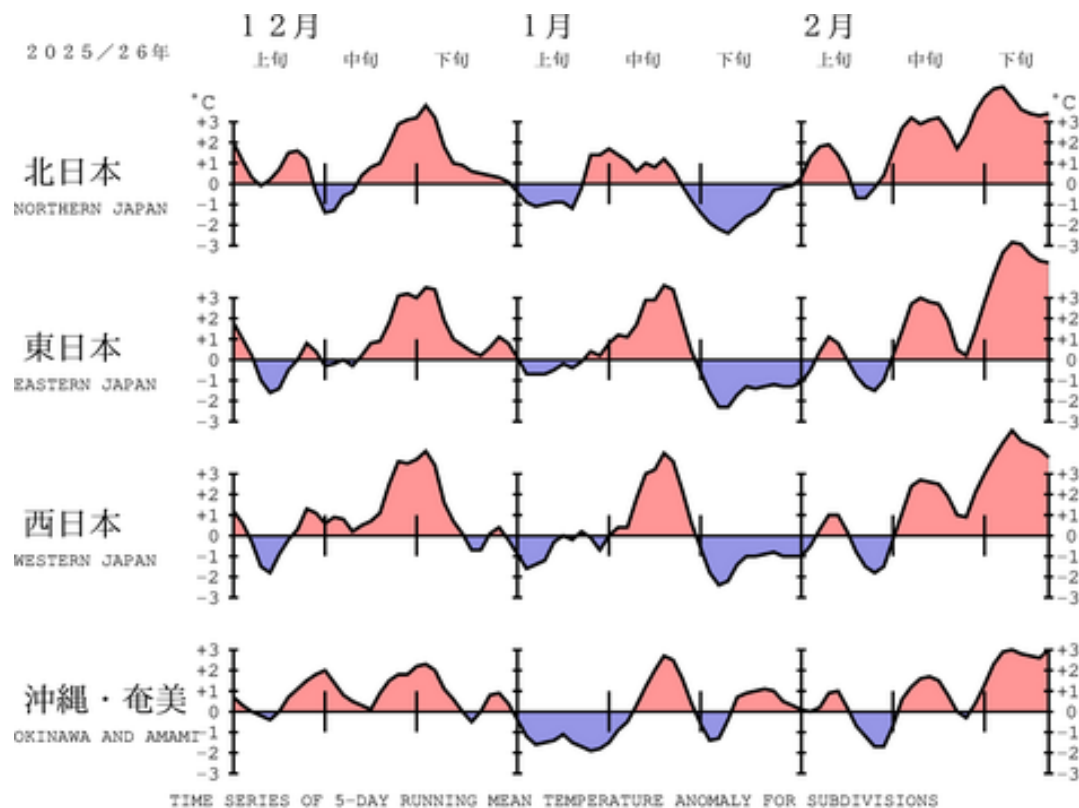
過去10年間の九州北部地方の地域平均の平均気温（平年差℃）と階級

年	12～2月	12月	1月	2月
2025/26	1.0	1.2	-0.1	1.7
2024/25	-0.8	-0.2	-0.2	-2.1
2023/24	1.6	0.8	1.3	2.6
2022/23	0.0	-1.4	0.3	1.2
2021/22	-0.5	0.0	0.0	-1.5
2020/21	0.5	-0.9	0.1	2.2
2019/20	1.8	1.3	2.6	1.7
2018/19	1.1	1.0	0.9	1.4
2017/18	-1.6	-1.8	-1.3	-1.7
2016/17	0.6	1.4	0.4	0.0



年の色は、**赤**：冬にエルニーニョ現象が発生している
青：冬にラニーニャ現象が発生している

2025/26年 地域平均気温平年差



地域平均気温平年差の5日移動平均時系列

更新日：2026年3月10日

- ・最近10年の12～2月の平均気温は、高い年が多い。エルニーニョ現象が発生した年は高温。
- ・昨冬（2025/26年）は、暖かい空気に覆われやすく、暖気の流入もみられたため、気温は高い。一方、寒気の影響を受ける時期もあり、北・東・西日本を中心に気温の変動が大きかった。
- 天候は、12月と2月を中心に冬型の気圧配置が続きにくく、高気圧に覆われやすかったため、少雨・多照。

1か月予報（9/17発表）

毎週木曜日14時30分発表

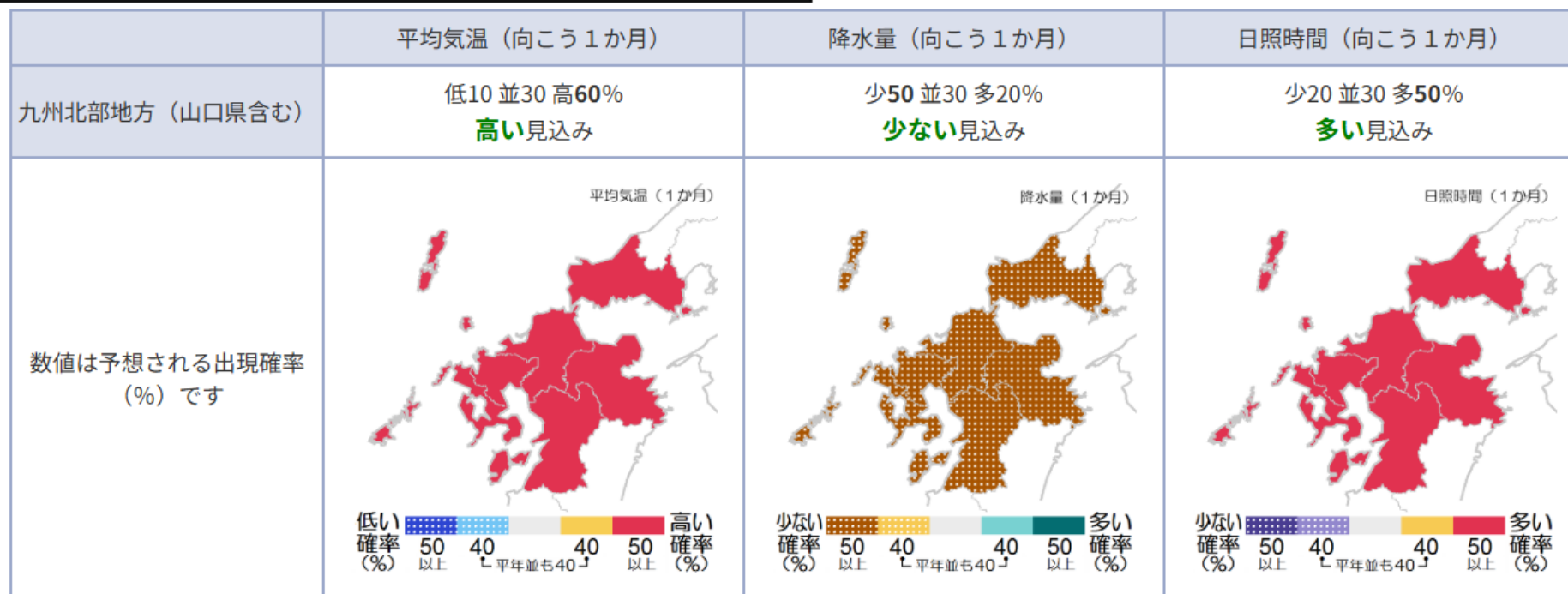
《特に注意を要する事項》

期間のはじめは、これまでの少雨の状態を解消するほどのまとまった雨が降る可能性は小さい見込みです。

予報のポイント

- ✓ 暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。
- ✓ 高気圧に覆われやすいため、向こう1か月の降水量は少なく、日照時間は多いでしょう。
- ✓ 7月から高気圧に覆われやすかったため、降水量の少ない状態が続いています。期間のはじめはこれまでの少雨の状態を解消するほどのまとまった雨が降る可能性は小さい見込みです。

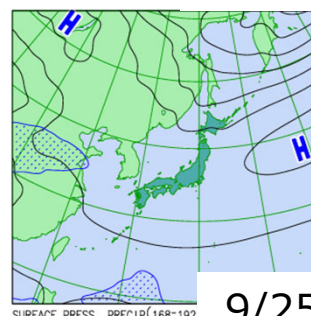
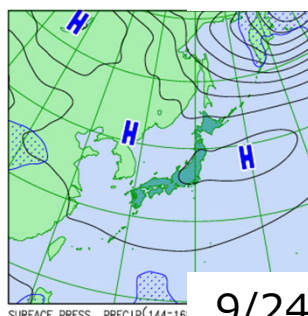
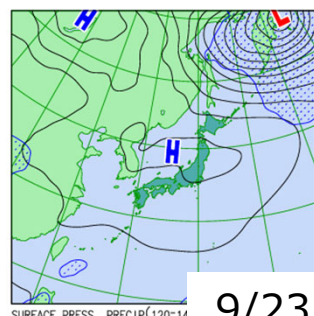
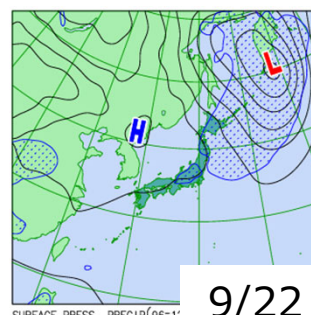
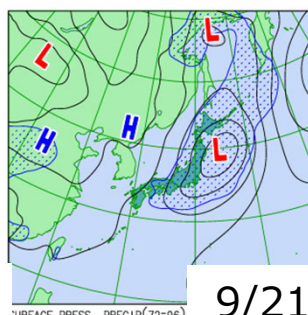
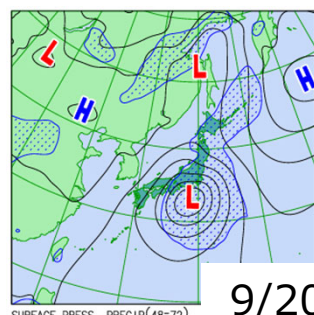
向こう1か月の平均気温・降水量・日照時間



週間天気予報（9/18 11時発表）

予想天気図

（21時の予想図）



L : 低気圧 H : 高気圧

部 : 24時間で5mm以上の予想降水域

週間天気予報

（福岡県）

福岡県の天気予報（7日先まで）

2026年09月18日11時 福岡管区气象台 発表

日付	今日 18日(金)	明日 19日(土)	明後日 20日(日)	21日(月)	22日(火)	23日(水)	24日(木)	25日(金)
福岡県	雨時々止む 	曇時々雨 	曇時々晴 	曇時々晴 	晴時々曇 	晴時々曇 	晴時々曇 	曇時々晴
降水確率(%)	-/-/80/60	40/70/70/40	20	20	20	20	20	30
信頼度	-	-	-	A	A	A	A	A
福岡 気温 (°C)	最高 29	27	28 (26~29)	26 (25~29)	28 (26~30)	29 (27~31)	30 (28~32)	29 (26~32)
	最低 -	23	23 (22~24)	22 (20~24)	21 (19~23)	20 (18~22)	20 (18~22)	22 (20~23)
向こう一週間（明日から7日先まで）の平年値								
降水量の7日間合計				最低気温		最高気温		
福岡				平年並 7 - 39mm		20.5°C		
						27.6°C		

向こう1週間の見通し

期間のはじめは曇りや雨の日が多いですが、その後は晴れの日が多いでしょう。

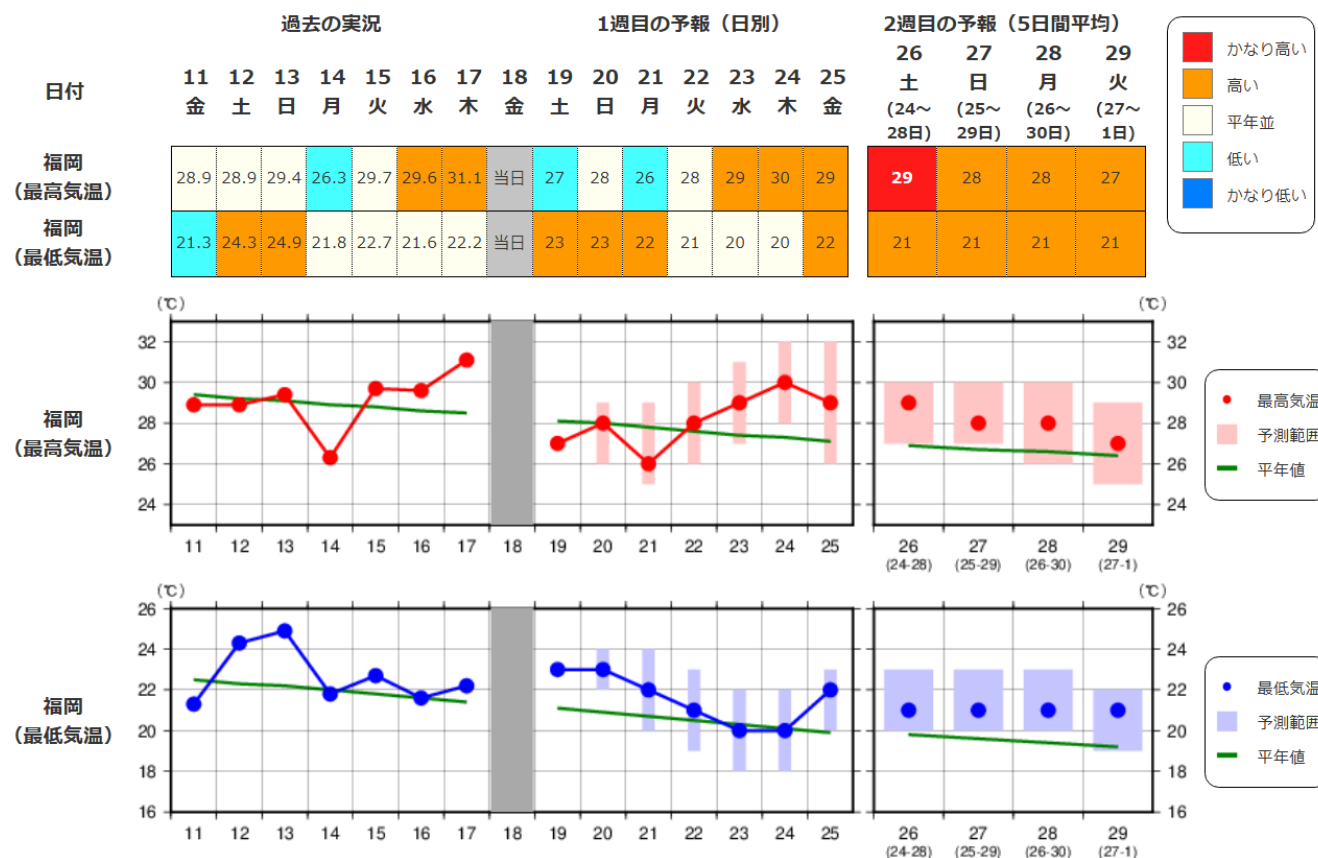
福岡の降水量は ほぼ **平年並** でしょう（平年並の範囲： 7 ～ 39 mm）。

2週間気温予報

2週間気温予報（福岡）

（9/17 14:30発表 9/18 11:00更新）

毎日14時30分発表
5時/11時/17時更新

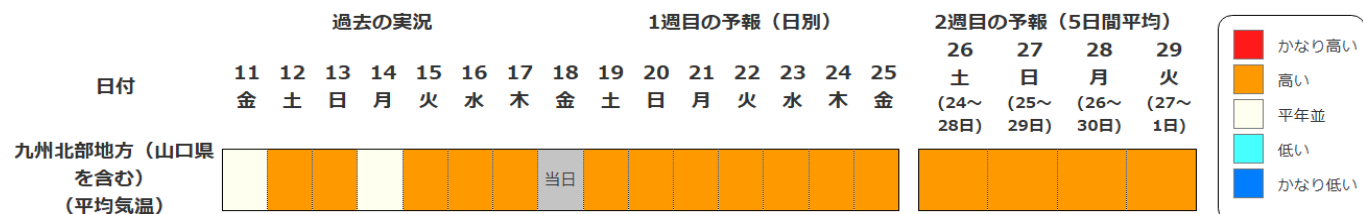


2週間気温予報 概況文 （抜粋）

令和8年9月17日14時30分
気象庁 発表

北陸地方、東海地方、西日本の向こう2週間の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高く、20日頃はかなり高い所もある見込みです。農作物の管理等に注意してください。

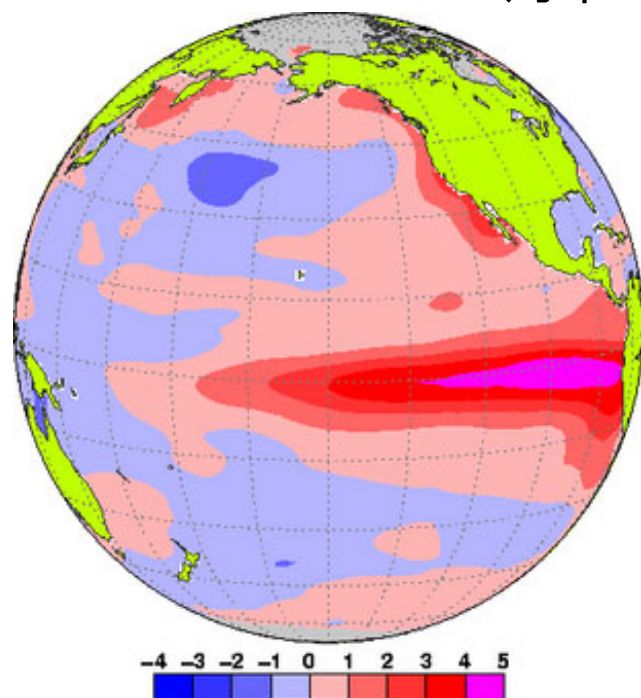
2週間気温予報（九州北部地方）



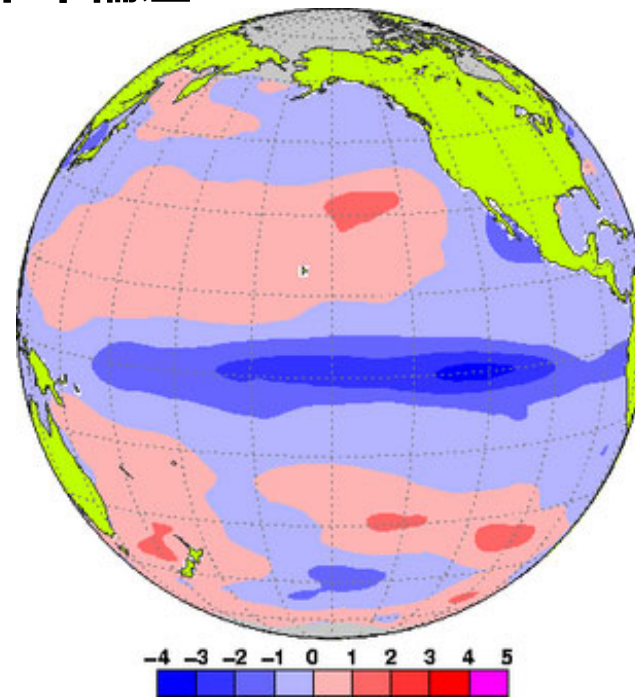
エルニーニョ現象・ラニーニャ現象①

エルニーニョ現象とは、太平洋赤道域の日付変更線付近から南米沿岸にかけて海面水温が平年より高くなり、その状態が1年程度続く現象です。逆に、同じ海域で海面水温が平年より低い状態が続く現象はラニーニャ現象と呼ばれ、それぞれ数年おきに発生します。エルニーニョ現象やラニーニャ現象は、日本を含め世界中の異常な天候の要因となり得ると考えられています。

月平均海面水温平年偏差



エルニーニョ現象発生時
(1997年11月)

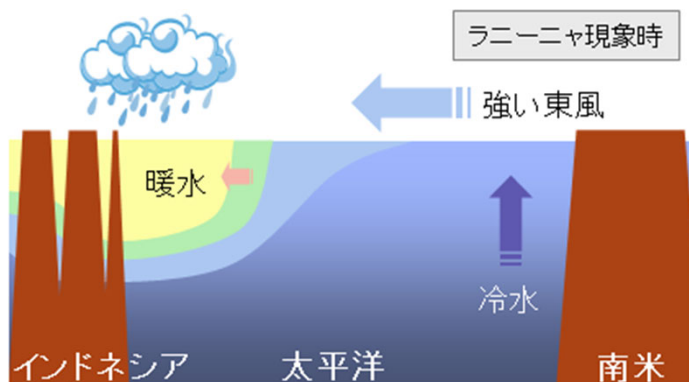
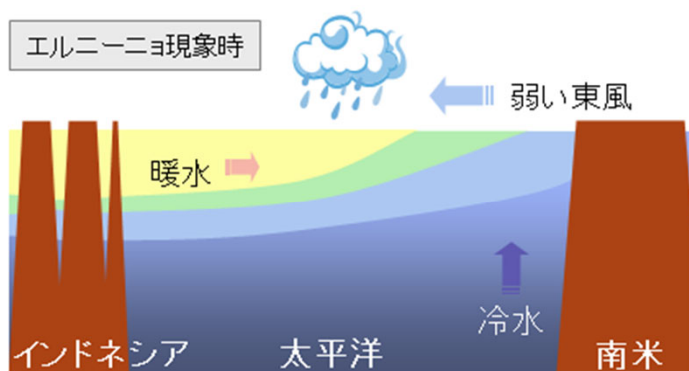
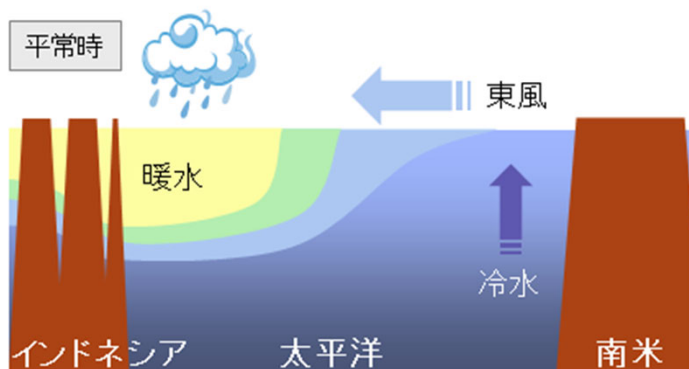


ラニーニャ現象発生時
(1988年12月)

気象庁ホームページ（エルニーニョ/ラニーニャ現象とは）

<https://www.data.jma.go.jp/cpd/data/elnino/learning/faq/whatiselnino.html>

エルニーニョ現象・ラニーニャ現象②



平常時の状態

太平洋の熱帯域では、貿易風と呼ばれる東風が常に吹いているため、海面付近の暖かい海水が太平洋の西側に吹き寄せられています。西部のインドネシア近海では海面下数百メートルまでの表層に暖かい海水が蓄積し、東部の南米沖では、この東風と地球の自転の効果によって深いところから冷たい海水が海面近くに湧き上がっています。このため、海面水温は太平洋赤道域の西部で高く、東部で低くなっています。海面水温の高い太平洋西部では、海面からの蒸発が盛んで、大気中に大量の水蒸気が供給され、上空で積乱雲が盛んに発生します。

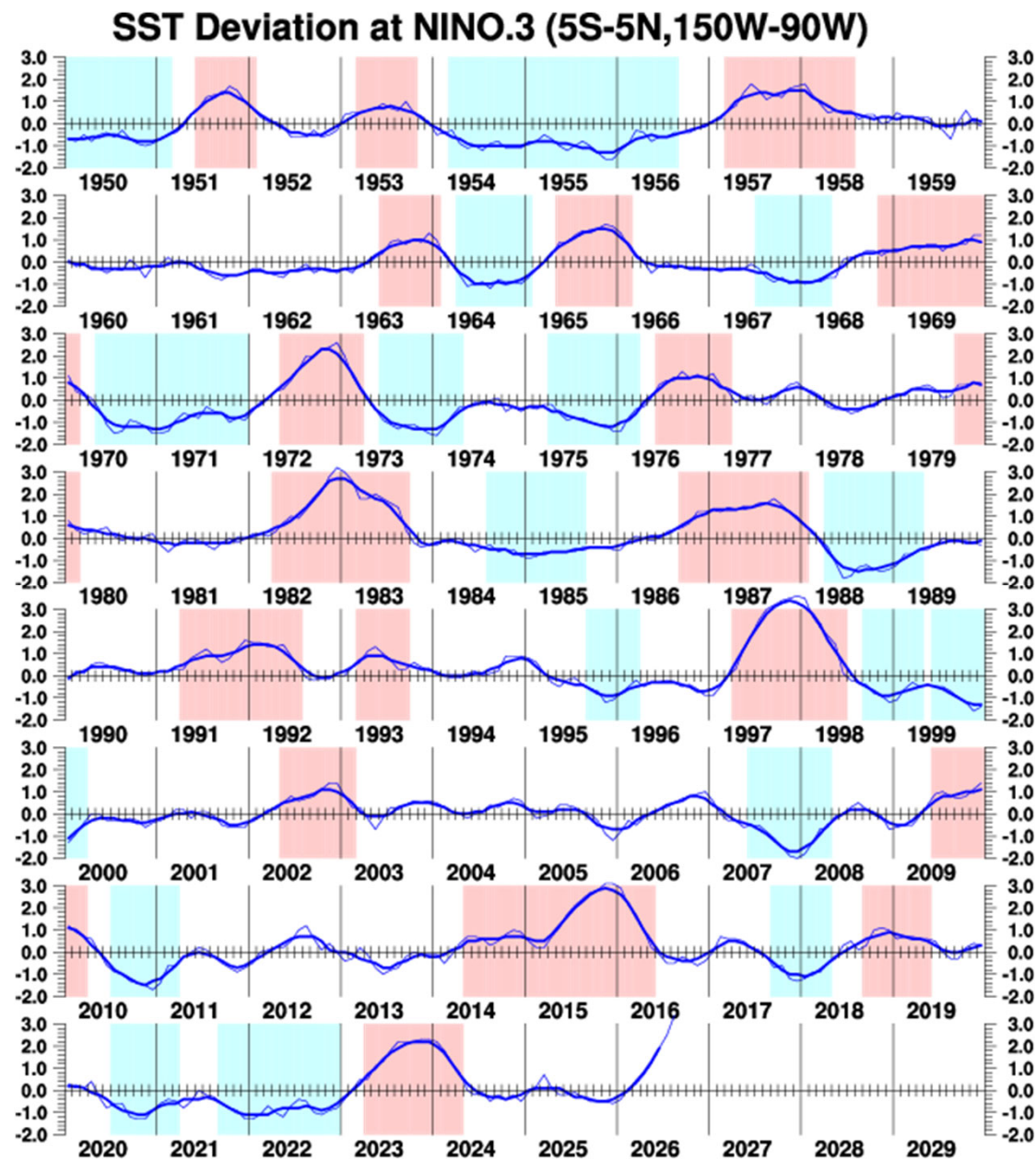
エルニーニョ現象時の状態

エルニーニョ現象が発生している時には、東風が平常時よりも弱くなり、西部に溜まっていた暖かい海水が東方へ広がるとともに、東部では冷たい水の湧き上がりが弱まっています。このため、太平洋赤道域の中部から東部では、海面水温が平常時よりも高くなっています。エルニーニョ現象発生時は、積乱雲が盛んに発生する海域が平常時より東へ移ります。

ラニーニャ現象時の状態

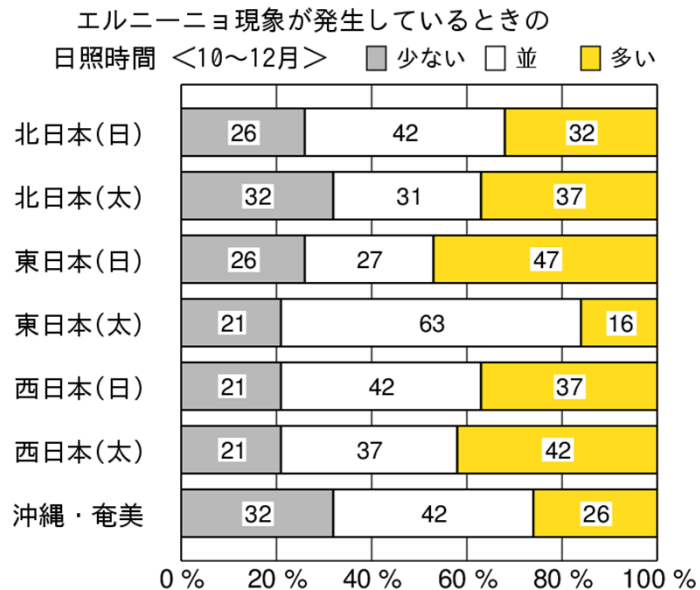
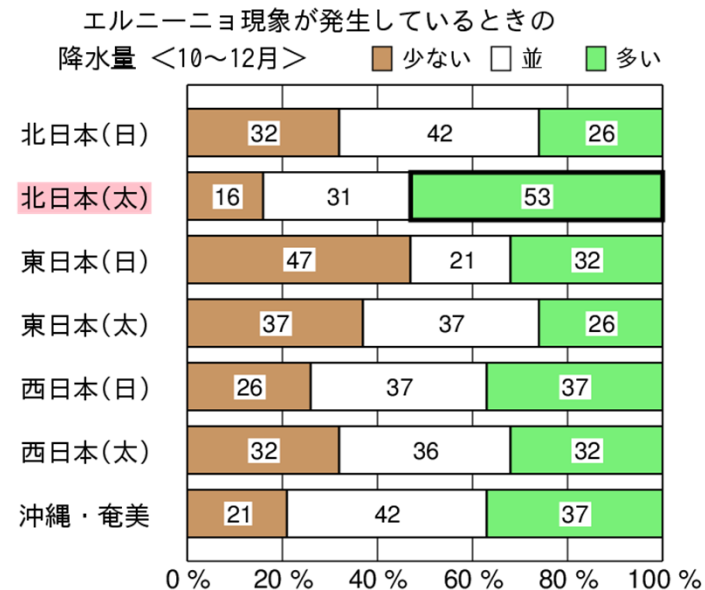
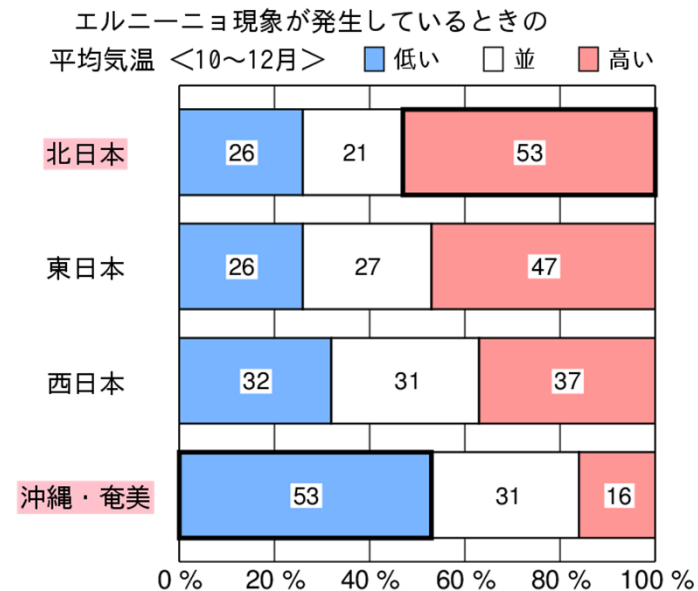
ラニーニャ現象が発生している時には、東風が平常時よりも強くなり、西部に暖かい海水がより厚く蓄積する一方、東部では冷たい水の湧き上がりの方が平常時より強くなります。このため、太平洋赤道域の中部から東部では、海面水温が平常時よりも低くなっています。ラニーニャ現象発生時は、インドネシア近海の海上では積乱雲がいつも盛んに発生します。

エルニーニョ現象・ラニーニャ現象の発生時期



エルニーニョ現象			ラニーニャ現象		
発生期間	季節数	差の最大値 (月平均)	発生期間	季節数	差の最小値 (月平均)
			1949年秋～1950/51年冬	6	-1.0
1951年夏～1951/52年冬	3	+1.7			
1953年春～1953年秋	3	+1.0	1954年春～1956年夏	10	-1.6
1957年春～1958年夏	6	+1.8			
1963年夏～1963/64年冬	3	+1.3	1964年春～1964/65年冬	4	-1.2
1965年春～1965/66年冬	4	+1.7	1967年夏～1968年春	4	-1.0
1968年秋～1969/70年冬	6	+1.2	1970年春～1971/72年冬	8	-1.5
1972年春～1973年春	5	+2.6	1973年夏～1974年春	4	-1.6
			1975年春～1976年春	5	-1.4
1976年夏～1977年春	4	+1.3			
1979年秋～1979/80年冬	2	+0.8			
1982年春～1983年秋	7	+3.2	1984年夏～1985年夏	5	-0.9
1986年秋～1987/88年冬	6	+1.8	1988年春～1989年春	5	-1.8
1991年春～1992年夏	6	+1.6			
1993年春～1993年秋	3	+1.3	1995年秋～1996年春	3	-1.2
1997年春～1998年夏	6	+3.6	1998年秋～1999年春	3	-1.2
			1999年夏～2000年春	4	-1.6
2002年春～2002/03年冬	4	+1.4	2007年夏～2008年春	4	-2.0
2009年夏～2010年春	4	+1.4	2010年夏～2011年春	4	-1.7
2014年春～2016年春	9	+3.1	2017年秋～2018年春	3	-1.3
2018年秋～2019年春	3	+1.1	2020年夏～2021年春	4	-1.3
			2021年秋～2022/23年冬	6	-1.3
2023年春～2024年春	5	+2.3			

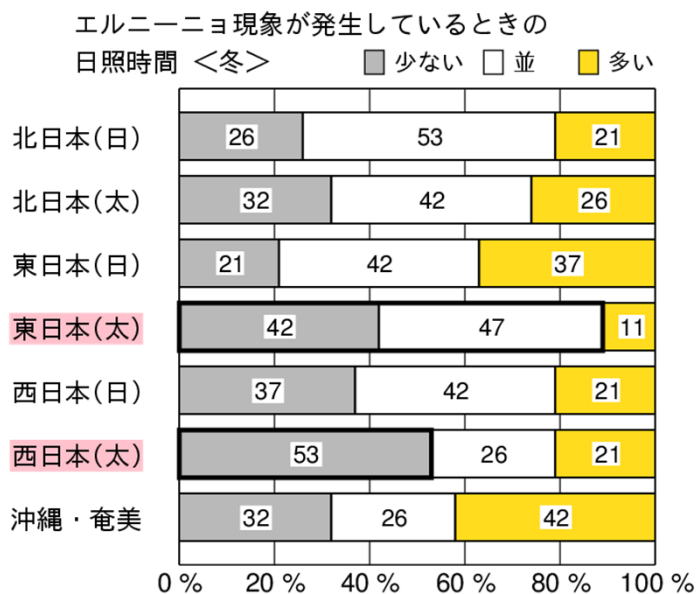
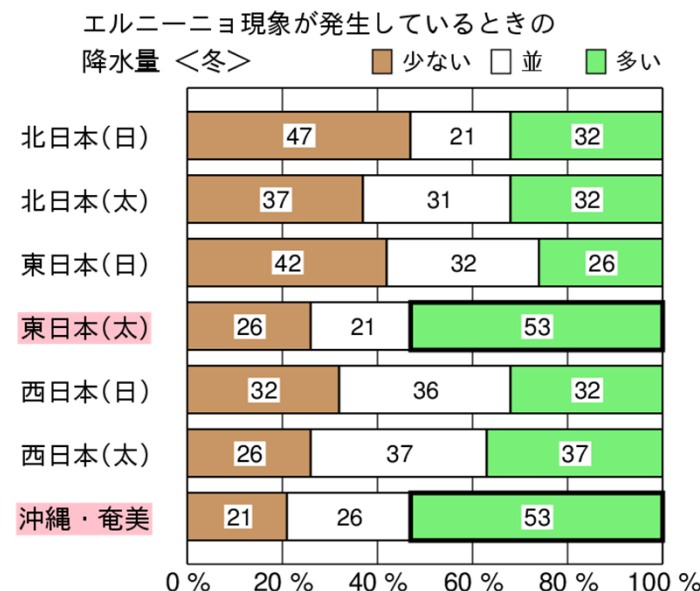
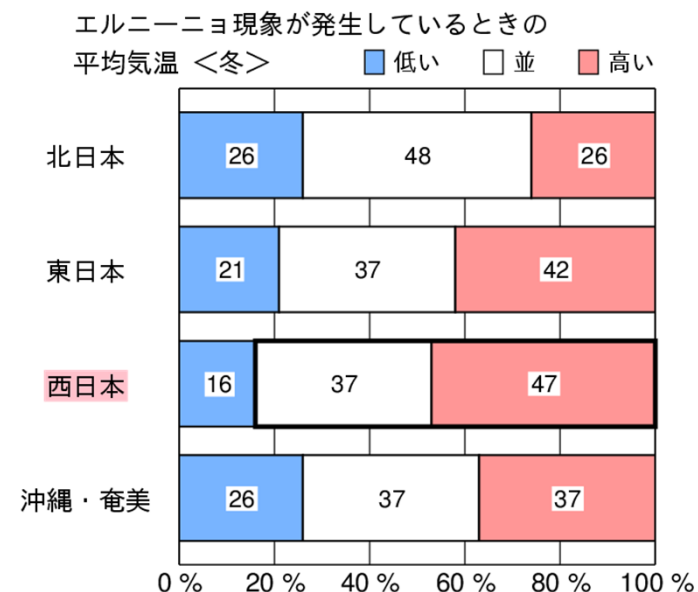
10～12月のエルニーニョ現象発生時の日本の天候の特徴



3か月（10～12月）の統計的に有意な傾向

- ・平均気温：北日本で高い。
沖縄・奄美で低い。
- ・降水量：北日本太平洋側で多い。
- ・日照時間：なし。

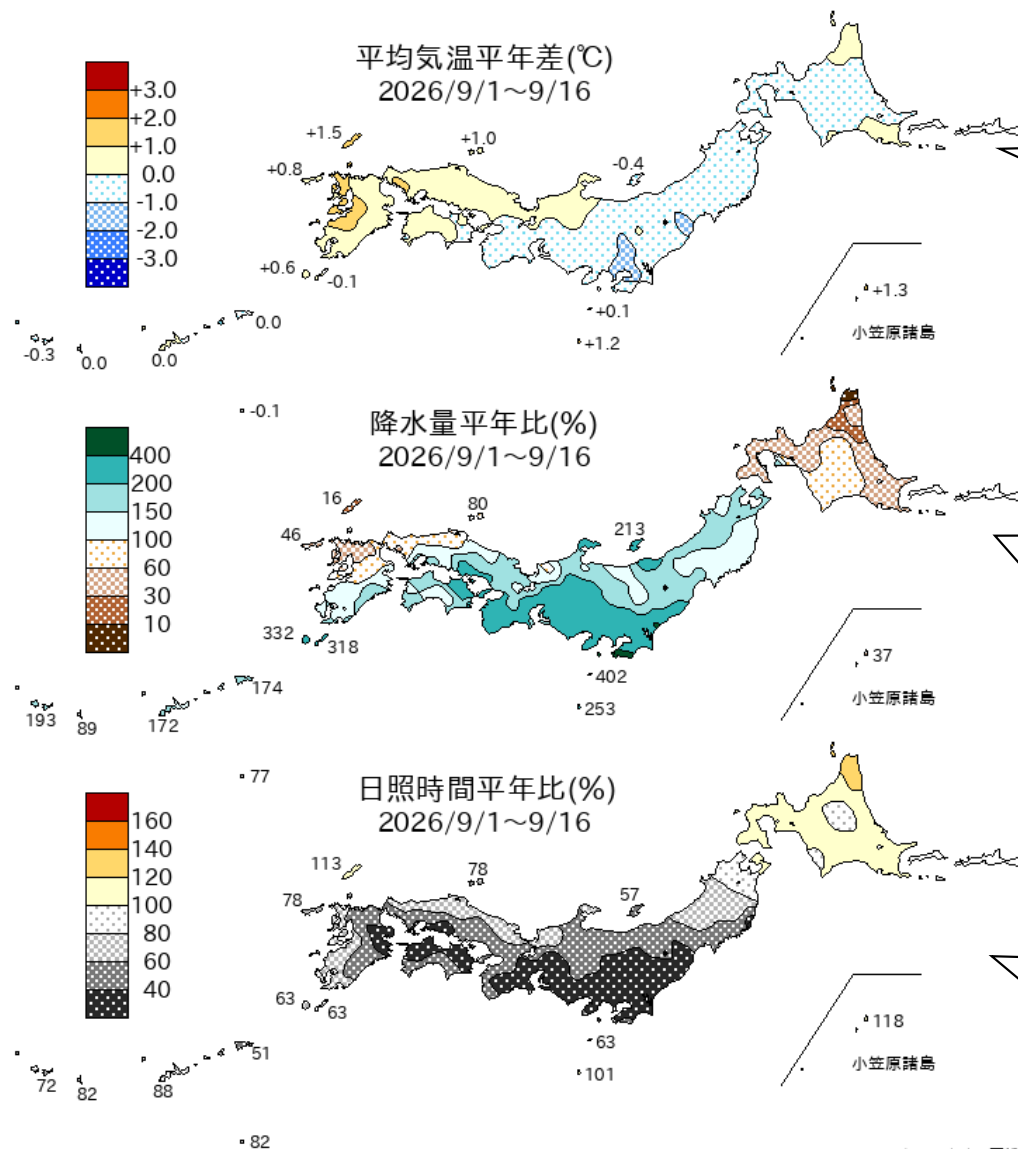
冬のエルニーニョ現象発生時の日本の天候の特徴



冬（12～2月）の統計的に有意な傾向

- ・平均気温：西日本で平年並か高い。
- ・降水量：東日本太平洋側、
沖縄・奄美で多い。
- ・日照時間：西日本太平洋側で少ない。
東日本太平洋側で平年並か少ない。

9月の実況（1～16日）



● 西日本で高温
西日本は期間のはじめを中心に、南からの暖かい空気が流れ込みやすかった。

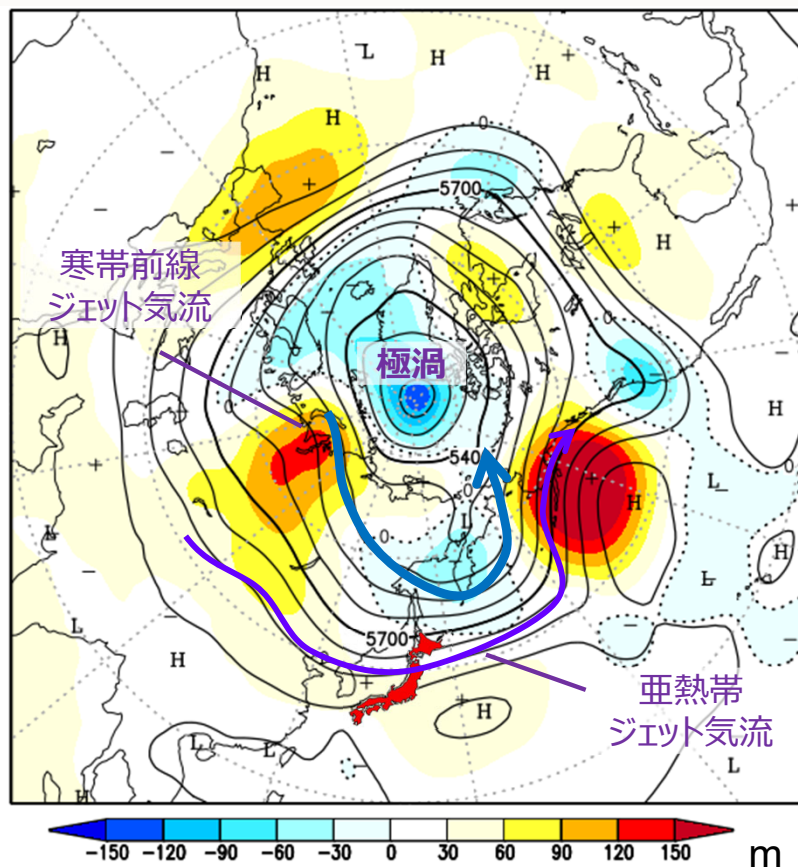
● 東日本太平洋側は顕著な多雨の一方、北・西日本日本海側は少雨。
東・西日本太平洋側を中心に台風第24号から変わった低気圧や活動の活発な秋雨前線の影響を受けやすかった。一方、北・西日本日本海側では前線や湿った空気の影響を受けにくかった。

● 東・西日本太平洋側を中心に、顕著な寡照
東・西日本太平洋側を中心に、台風第24号や第24号から変わった熱帯低気圧や秋雨前線のほか、湿った空気の影響を受けやすかった。

(2026/9/17更新)
All rights reserved. Copyright(c) Japan Meteorological Agency

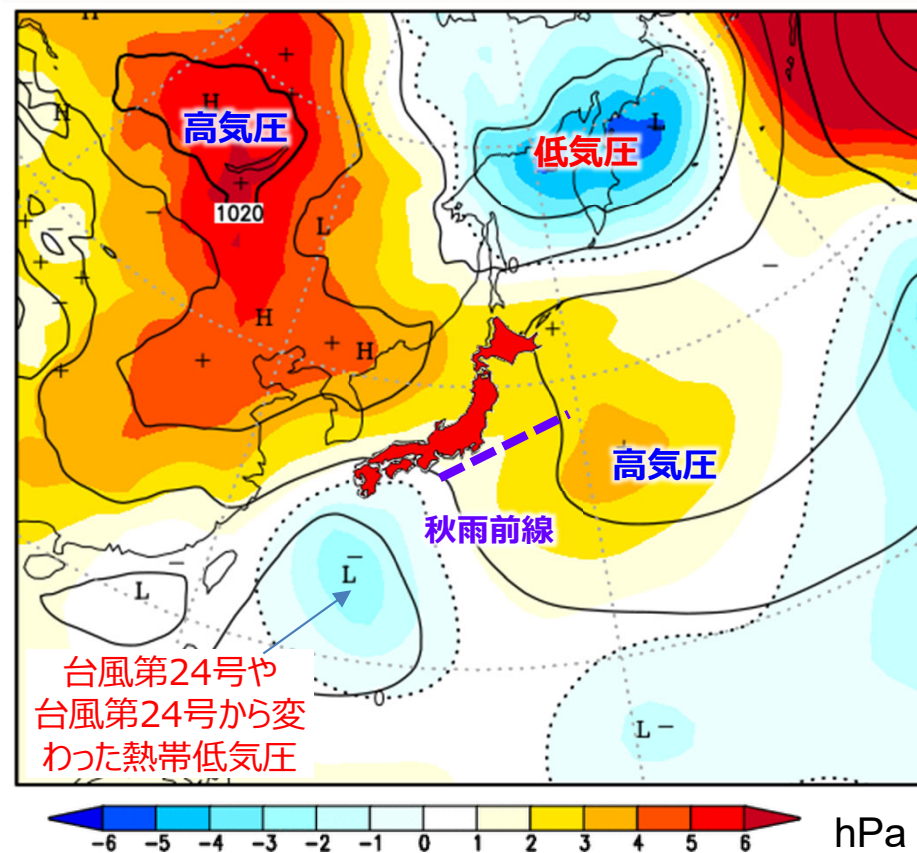
9月（1～16日）の大気の流れの特徴

500hPa高度と平年偏差



亜熱帯ジェット気流は日本付近では、ほぼ平年の位置で強かった。また、日本の南東海上を中心に高気圧が強く、本州付近は正偏差に覆われ、西日本では暖かな空気に覆われた。一方、寒帯前線ジェット気流は日本の東で南に蛇行し、北日本の東にはトラフが南下。北日本中心に寒気が南下した。

海面気圧と平年偏差



東シナ海付近を中心に負偏差で、沖縄・奄美では台風第24号や湿った空気の影響を受けやすかった。一方、日本の南東海上で高気圧が強かったため、その周辺を吹く湿った空気が流れこみやすく、また、台風第24号やそれから変わった熱帯低気圧の影響により、東・西日本付近に停滞した秋雨前線の活動が活発化した。

大雨の発生頻度の変化

気象庁HP

大雨や猛暑日など（極端現象）のこれまでの変化



大雨の年間発生頻度は増加しており、

- より強度の強い雨ほど頻度の増加率が大い
- 1980年頃と比較して、おおむね2倍程度(※)に頻度が増加している
(※ 1時間降水量80mm以上、3時間降水量150mm以上、日降水量300mm以上など強度の強い雨)

これらの変化には、地球温暖化が影響している可能性がある

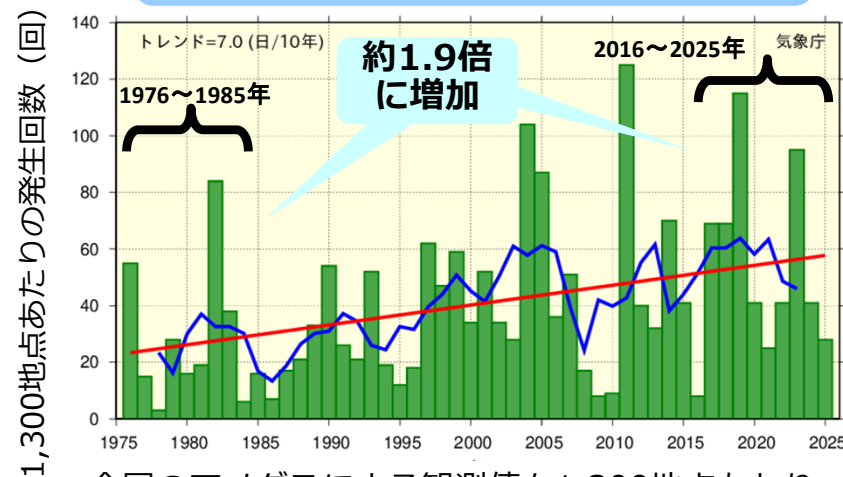
⇒大雨に対する備えの必要性を認識していただきたい

変化の倍率（2016~2025年平均 / 1976~1985年平均）

1時間降水量50mm以上	約1.5倍（約226回→約340回）
1時間降水量80mm以上	約1.8倍（約14回→約25回）
1時間降水量100mm以上	約2.0倍（約2.2回→約4.4回）
3時間降水量100mm以上	約1.6倍（約155回→約248回）
3時間降水量150mm以上	約1.8倍（約19回→約33回）
3時間降水量200mm以上	約2.1倍（約2.8回→約5.9回）
日降水量200mm以上	約1.5倍（約160日→約240日）
日降水量300mm以上	約1.9倍（約28日→約53日）
日降水量400mm以上	約2.1倍（約6.4日→約13日）

- 変化の倍率は、最初の10年間（1976～1985年）と最近10年間（2016～2025年）の比。
- 回数及び日数はアメダス1,300地点あたりの換算値。

日降水量300mm以上の大雨の年間日数（1976年～）



- 全国のアメダスによる観測値を1,300地点あたりに換算した値
- 棒グラフ（緑色）は各年の値、青線は5年移動平均値、赤い直線は長期変化傾向を示す。

あるいは、以下のような幅を持った表現もできる。ただし、数値は統計手法や期間等で変わりうることに留意。

1980年頃と比較して、約1.8倍～約2.1倍(※)に頻度が増加している

(※ 1時間降水量80mm以上、3時間降水量150mm以上、日降水量300mm以上など強度の強い雨。統計期間は1976～2025年)

季節予報とは？

気象庁HP
季節予報って何？



季節予報は、日々の天気ではなく、ある地域の大まかな天候（平年の気候と比べて、どのくらい偏った天候か）を予報します。

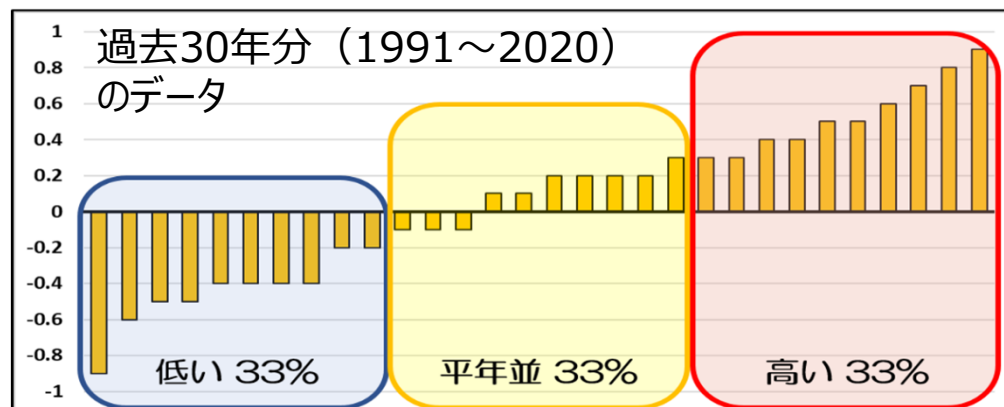
地域：日本全国を11地方に分類（右図）

予報する要素

例） 1 か月間、3 か月間の平均気温
1 か月間、3 か月間の降水量
1 か月間、3 か月間の日照時間 など



予報は3つの階級
低い（少ない）・平年並・高い（多い）の
どの階級に入るかを予報します

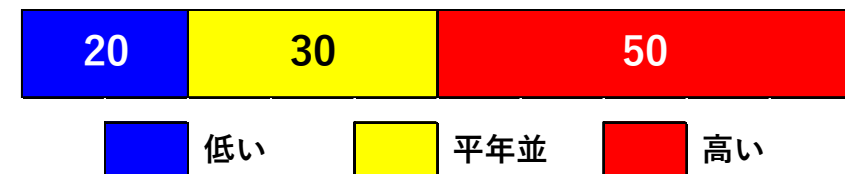


現在が平年値期間の30年と同じ気候だとした場合、
「高い」「平年並」「低い」という階級になる可能性は、それぞれ33%。

予報区



予報例 向こう3か月の気温



平年並か低くなる確率も50%

高くなる確率は
50%